

令和3年度

第23回
わたしの主張岩手県大会

発表文集



わたしの主張岩手県大会実行委員会

目 次

1	はじめに	1
2	大会日程	2
3	大会風景	3
4	わたしの主張発表作品	5

区 分	発 表 題	学 校 名	学年	氏 名
最優秀賞	挨拶	滝沢市立柳沢中学校	3 年	高 橋 美 花
優 秀 賞	SHINE 光	八幡平市立西根中学校	3 年	工 藤 ほのか
		花巻市立花巻北中学校	3 年	留 場 優 那
優 良 賞	ありのままの自分を受け入れて 希望のある社会へ 弱いからこそ	盛岡市立下橋中学校	3 年	林 美 羽
		奥州市立東水沢中学校	3 年	藤 代 菜 央
		釜石市立大平中学校	3 年	菅 原 小 雪
入 賞	振り返れば、わたし 「知ること」から始めよう 笑顔を力に 思いやりの力 本当の豊かさ 支え合って認め合って 救える命は必ずあるから ひとりでも多くの命を 道の選択 ともに生きていく 夢を叶えるために	盛岡市立上田中学校	3 年	藤 原 麻 央
		矢巾町立矢巾北中学校	3 年	川 向 杏 奈
		北上市立北上北中学校	3 年	小田島 芽 吹
		一関市立桜町中学校	3 年	岩 本 智 陽
		一関市立藤沢中学校	3 年	近 江 美 咲
		大船渡市立第一中学校	3 年	金 野 紗 弓
		遠野市立遠野西中学校	3 年	藤 原 真 結
		宮古市立川井中学校	3 年	松 草 奏 重
		田野畑村立田野畑中学校	3 年	熊 谷 珠 奈
		野田村立野田中学校	3 年	大 澤 陽 和
		軽米町立軽米中学校	3 年	菅 原 静

※ 各賞受賞作品は地区順に掲載しています。

5	審査委員長講評	23
6	各地区大会の開催結果	24
7	審査要領	28
8	第 23 回わたしの主張岩手県大会実施要綱	29
9	わたしの主張岩手県大会の期日・会場及び最優秀賞受賞者	31
10	参考 「少年の主張全国大会～わたしの主張 2021～」入賞作品	32

は じ め に

第 23 回わたしの主張岩手県大会は、令和 3 年 9 月 15 日（水）に岩手県庁会議室において開催されました。この大会には、今年は約 3,600 名の中学生が参加し、県大会には、地区大会で選ばれた代表 17 名が出場しました。なお、今大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、各地区代表者が参集しての開催を取り止め、県庁に会場を移し、審査方法を作文及び映像による審査に変更しての実施となりました。

この大会は、次代を担う中学生に、未来に向けての夢、社会に対しての意見や希望、日常生活の中で感じたことや考えたことを発表する場を提供することにより、自らの主張を正しく伝え理解してもらう力を身に付けるとともに、地域社会との関わりについて考え、行動する契機とするほか、多くの県民に中学生の考えや行動への理解を深めていただくことを通じて、子どもたちの健全育成の充実を期すことを目的として実施しているものです。

主張の内容は、日常生活、学校生活、クラブ活動など、自分の身の回りで起こる様々な体験を通して、気づいたり学んだりした「生き方」、「考え方」などを訴えるものとなっており、瑞々しい感性と澁刺とした態度で、素直で中学生らしい思いが込められた主張は、どれも感動を与える素晴らしいものばかりでした。特に本年は、家族の障がいや自閉症、自らの病気、LGBT（性的少数者）、命の尊さや重さ、また、家族や友人とのふれあいや支え合う心や思いやる気持ちを描いた発表が目立ちました。

発表の内容となっている家族との関わり、人との関わり、地域との関わりの中で思いやりの心や支え合う気持ちをもって生きていく大切さなどは、今の時代に求められる家族愛、郷土愛そして地域の防犯意識の啓発にもつながるものと考えられるところです。

この発表文集から、その主張に込められたメッセージをしっかりと受け止めていただき、次代を担っていく中学生が何を感じ、考えているのかを知る契機としていただければ幸いです。

なお、本大会の最優秀賞受賞者の高橋美花さんは、令和 3 年 11 月 14 日（日）に国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会（WEB 開催）」において、努力賞を受賞しました。

おわりに、本大会を開催するにあたり、盛岡市、盛岡市教育委員会をはじめ、関係者のご協力とお力添えをいただきましたことに感謝申し上げ、巻頭のごあいさつといたします。

令和 3 年 12 月

わたしの主張岩手県大会実行委員会

第 23 回わたしの主張岩手県大会（審査会）日程

日時：令和3年9月15日（水）13：15～16：10

会場：岩手県庁 8 階 8-L 会議室

- | | | | |
|---|-----------|--|---------|
| 1 | 開会のことば | わたしの主張岩手県大会実行委員会
岩手県環境生活部若者女性協働推進室長 | 高 橋 久 代 |
| 2 | 主催者あいさつ | わたしの主張岩手県大会実行委員会
(公社)岩手県青少年育成県民会議会長 | 菅 野 洋 樹 |
| 3 | 映 像 発 表 | | |
| 4 | 審 査 会 | | |
| 5 | 成績発表並びに講評 | (株) 岩手日報社論説委員会委員長
わたしの主張岩手県大会審査委員長 | 郷 右 近 勤 |
| 6 | 閉会のことば | わたしの主張岩手県大会実行委員会
岩手県環境生活部若者女性協働推進室長 | 高 橋 久 代 |

大会風景



主催者あいさつ
菅野洋樹県民会議会長



成績発表・講評
郷右近勤審査委員長

発表風景

※映像より抜粋



入 賞 者



【最優秀賞】

滝沢市立柳沢中学校 3 年 高橋美花さん



【優秀賞】

八幡平市立西根中学校 3 年 工藤ほのかさん



【優秀賞】

花巻市立花巻北中学校 3 年 留場優那さん



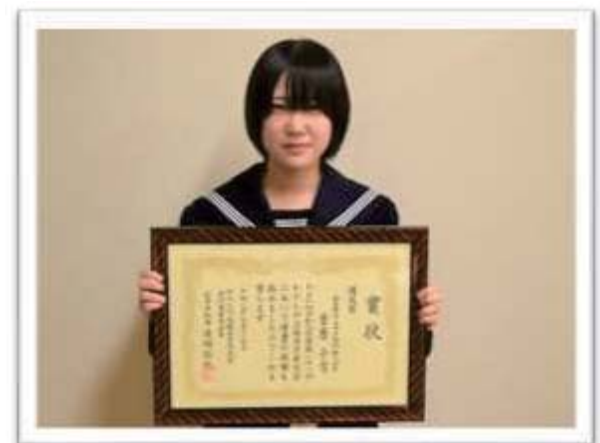
【優良賞】

盛岡市立下橋中学校 3 年 林美羽さん



【優良賞】

奥州市立東水沢中学校 3 年 藤代菜央さん



【優良賞】

釜石市立大平中学校 3 年 菅原小雪さん

第 23 回わたしの主張岩手県大会出場者 発表作品

(原文のまま掲載)

※ 縦書を横書としたため、漢数字の一部を算用数字に置き換えました。



最優秀賞

挨拶

滝沢市立柳沢中学校 3年

高橋 美花（たかはし ちゆな）

今年参加した進学セミナーで、講師の看護師さんが、こんなお話をしてくれた。

「働き始めた頃は、自分が役に立っているのか実感できずに、悩んでいました。でも、悩みながらも、患者さんとのコミュニケーションは毎日欠かさず、自分に何か力になれることがないか、探していたんです。するとあるとき、『いつも話し相手になってくれて嬉しいよ。ありがとうね。あなたのおかげで元気が出るよ。』と言ってくれた患者さんがいました。そんな出来事があって、私は挨拶や会話によって、患者さんの心の支えになれることが分かったんです。」

元気が出る挨拶って、なんだろう。私は、セミナーに参加する前から、日常的に挨拶をしている。でも、家族も、友達も、私と挨拶を交わした人が元気になっているだろうか。答えはノーだと思う。では、看護師さんの挨拶と、私の挨拶は、何が違うのだろうか。

看護師さんは、患者さんのその日の気分や体調を、挨拶をしたときの、表情や声のトーンから読み取って、そのあとにかけ言葉を考えるそうだ。挨拶をしながら、相手のことを考えているということだ。

では、私はどうだろう。「おはよう。」私は、挨拶はするけれど、挨拶だけだ。そこで完結している。挨拶のあとには何もない。自分ではきちんとしていたつもりの挨拶は、形式的なものだったのだ。これでは、看護師さんの挨拶には程遠い。

セミナーに参加した次の日から、私は意識を変

えた。「なにかいいことあったのかな」「いつもより元気ないな。」挨拶をしたときの表情や声のトーンから、相手の気持ちを考えて、話題や言葉を選ぶようにしてみた。すると、そのあとの会話が以前よりも弾んだ。友達が相談してくれるようになった。私の挨拶で、相手が元気になったのかは分からない。でも、相手と心が通った、そんな実感があった。挨拶をしたあとに、どれだけ相手のことを考えられるか、それこそが、より良いコミュニケーションのために必要なことではないだろうか。セミナー参加後の自身の実践から、私は、相手のことを考える姿勢、相手に歩み寄る姿勢が、相手との心の距離を縮めることに気付くことができた。

だから私は、近い将来、看護師になったときに、挨拶から始まるコミュニケーションを何よりも大切にして、働いていきたい。そして、挨拶や会話の積み重ねによって、患者さんが、私に対して、気軽に相談ができるような関係を築いていきたい。

あなたは、コミュニケーションのことで悩むことはあるだろうか。挨拶は、人と人との関わりの、スタートラインにすぎない。相手を思いやる姿勢があれば、そのスタートラインから一歩前に踏み出せる。誰かの歩み寄りを待たず、自ら一歩を踏み出すことで、結果が変わってくるはずだ。だから私は、今日も挨拶をする。「おはよう」

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私は友達、家族、地域の方などたくさんの人との関わりの中で「挨拶」が大切だと気づかされました。ですから、今度私の体験したことを踏まえ、気持ちを表に出すのが苦手な人や友達、家族との会話で悩んでいる人にこの主張を届けたいと思いました。挨拶を心がけることで、その人の習慣、性格、人柄が変われば、相手もその変化に気づいてくれると思います。なにより、毎日の挨拶やコミュニケーションが相手の心を大きく動かすことを知ってほしいです。



優秀賞

SHINE

八幡平市立西根中学校 3年

工 藤 ほのか（くどう ほのか）

髪は短く、背の順は後ろの方。そんな私は、男なのか女なのかと聞かれることがあります。その度に私は声を高くして「女です」と答えます。答えれば答える程、自分の心の中には「死ね」と書かれた重い袋が積まれます。「心の性は男でも女でもない」それが本当の答えなのに。言えない自分、人とは違う自分がとても嫌いでした。

そんな感情とは裏腹に、「男でも女でもない自分を知ってほしい」私はそう思ってもいたのです。

「もし身近な人に、LGBTの人がいたらどう思う？」

私は友達に聞きました。自分のことだと言わなかったのは、「僕そういうのじゃないから。好きにならないでね」とか、「自分が特別だと思うなよ」とか、そんな反応が返ってくるのが怖かったからです。なのであえて遠回しに言ったのです。彼は衝撃的な言葉を放ちました。

「怖い。」

「見た目は男なのに心は女。そういうの無理。気持ち悪い。」

「怖い」「気持ち悪い」耳を疑う言葉が並べられます。私は言いました。

「そうだよ。気持ち悪。」

世界にはたくさんのLGBTの人がいるのに。自分のことなのに。私は自分が怖くなりました。人の悪口を言う自分。他の人からは「気持ち悪くて怖い」と思われている自分……。

それから私は、本当は嫌だと思っていることも、無理をして他の女の子たちに合わせようとしてしました。本当はスラックスで登校したい。性別を問わず使用できるトイレを使いたい。恋愛話は私には

よく分からない。この心の声を、自分の声にして叫べたら。矛盾した行動をやめられたら。感情と行動の間のズレは、私を不安にさせました。

そして再び、「死ね」と書かれた袋が積まれるようになりました。苦しさに堪えられなくなり、あの時とは違う友達に打ち明けました。彼女は笑った？私を否定した？いいえ。彼女は

「かっこいい」

とただ一言だけ言いました。自分が他の人とは違うこと。それはかっこいいと。その一言が私を変えました。本当の自分を隠さなくてもいい。自分を否定しなくても良いのだと、その時分かったのです。

私は今、堂々と生きています。髪を切る時はジェンダーレスの人たちの写真を見せます。服も自分の好きなものを選び自由に着ています。そして、一人称は「俺」です。彼女の一言で、私の世界は変わりました。

もし、今あなたが悩んでいるなら、他の人に話してみてください。あなたを理解し、味方になってくれる人は必ずいます。必ずです。そして「自分なんか死ねばいいのに」と思っているあなたへ。「死ね」をローマ字で書くと「SHINE」つまり「SHINE」「輝く」という意味です。「死ね」という言葉で否定していた自分は、輝く自分かもしれないのです。

「他の人とは違う」は私の弱点でした。でも今は違います。「他の人とは違う」は私にとって「誇り」です。私はこの誇りを胸に、輝かしい毎日をこれから作っていきたいと思います。

○ この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

現在、LGBTや障害、病気などは「個性」といわれています。でも、自分の周りをみてみると「気持ち悪い」「かわいそう」「変」といった言葉であふれていました。悩みを打ち明けられないあなた自身も、その周りの人も、少しはそう思っているのかも。「個性」という言葉が先走りをして、人を悪く言う言葉はまだ生活にとり残されたままです。それを変える一歩として、「かっこいい」と私も言えるようになりたいです。



優秀賞

光

花巻市立花巻北中学校 3年

留場 優那（とめば ゆうな）

私は6人きょうだいの一番上の姉として育ってきました。父はいません。父がいなくなってから、母は一人で私たち6人を育ててきてくれました。

6年生の頃から私の生活は少しずつ歪み始めました。住んでいた遠野市には幼なじみや大好きな友だちがたくさんいて、充実した日々を過ごしていました。そんなある日、父と母が別れることになりました。私は父が大好きだったので、影響が大きかったのかもしれませんが。ただひたすらに物足りなく、落ち着きませんでした。本当に寂しかった。私はぽっかりと空いた心の穴をSNSで埋めようとしていました。毎日、深夜まで。でも、寂しさは埋められず、泣いてばかりいました。

次の年、母の転勤を機に、花巻市へ引っ越ししました。大好きだった街や仲間と別れたこともあり、私の生活は更に歪んでいきました。前にも増して、ネット上の人たちとつながるようになりました。いつ崩れてもおかしくない私の心を守る唯一の方法。今思えば、危険な道へと進む一歩手前でした。生きることの終止符を打とうとした私は、ある日、家のベランダの柵を乗り越えようとしてしまいました。しかし、怖くて怖くて足が震え、結局飛び降りることはできませんでした。今まで心配をかけたくない一心で黙っていましたが、苦しさに耐えられず、母に私の気持ちを打ち明けました。母は「そっか」と優しく受け止めてくれました。次の日母は仕事を休み、私の話をずっと聞いてくれました。柔らかに包み込むような母の姿は私の気持ちを楽にしてくれました。母が「頑張りすぎないで少しずつやっていこう」と言ってくれた時は安心しました。心に巻きついていたずっしりとした重い鎖が解かれ、ひとすじの光が見えたような気がしました。その日を境に、「どうせ私なんて」という卑下した考えが少しずつ消え、気持ちに余裕が持てるようになりました。ハンドボール部の仲間との存在も大きかったです。練習を休んでいた私をずっと待つ

ていてくれました。また、今までは怖くて見せられなかった自分を全て穏やかに受け止めてくれました。自分の弱さ、ドロドロした気持ちまでも。周りがぱっと明るくなり、生きる希望が見え始めたのです。

よく大人は「悩まないで相談してね」と言います。悩みの真ただ中にいる私にとっては馬鹿馬鹿しく思えました。私の気持ちなんて知らないくせに、どうせ解決できないと思っていたからです。しかし、気付きました。話すことで得られるのはちょっとした心の余裕。そうすることで、一歩前に出て新しい視点で考えられるようになります。そして、辛い気持ちを抱えている人に手を差し伸べられるのは、身近にいる人、つまり、家族や仲間です。私が今も生きていられるのは、母や仲間との存在があったからです。大事なものは、SNSのようないわゆるつながりではありません。ありのままの自分でいいという安心感を共有できる関係こそが大切だと思うのです。

厚生労働省によると、全国の10代の自殺者は令和元年から2年と増加し、昨年度は約800人が亡くなっています。また、昨年度、岩手県の人口10万人当たりの自殺者の割合を示す「自殺率」は全国でワースト1位になっています。私はこの事実を知り、悔しさとやるせなさを感じました。同じ辛さや孤独を味わった私にできることはないかと。私が将来就きたい職業の一つに、心理カウンセラーがあります。母や部活動の仲間のように、苦しんでいる人を光で照らしてあげられるような人になりたいと考えています。心の痛みを共有して、全身で安心感を与えたい。悩みや苦しさを吐き出せる環境作り、安心できる人間関係作りの手助けをしたいと思っています。そして、命を絶つ人を少しでも減らしたいです。光を見つけ、新しい一歩を踏み出す人が増えることを信じて。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私と同じような悩みは誰しも抱えるものだと思います。その中で特に中学3年生のみなさんに届けたいと考えています。誰もが感じている苦しさ…だけどみんな違う苦しさ。そんな苦しい心を少しでも楽にしてあげたい。私の苦しさをすることで、「大丈夫だよ。安心して」そんなメッセージを感じてもらいたいです。この主張を届けて、少しでも誰かの支えになればいいなと思います。



優良賞

ありのままの自分を受け入れて

盛岡市立下橋中学校 3年

林 美 羽（はやし みう）

「好きなものだけ食べればいいなんてうらやましいな。」

そんな何気ない一言が幼い私を何度も苦しめました。そして、いつしか人と違う自分が嫌いになっていきました。

「みうちゃん。これあげる。」にっこり笑って友達くれたお菓子。うれしくて笑顔でうけとるけれど、すぐにポケットにしまいます。何が使われているかわからないものは口にすることができないのです。私は重度の食物アレルギーをもって生まれてきました。そんな私に身に付いた習慣は、まっ先に原材料名の表示を見ること。どうせ食べられないと覚悟はしていてもそれを確認するたびにおいしそうに食べている周りの人がうらやましくて…なんでこんな体に生まれてきたんだろう。と自分を責めてしまいます。

そんな私に母は治療をすすめました。それは、アレルギーの食材を少しずつ口にすることは経過をみるという気の遠くなるようなもので、少しでも反応が出るとだるさや吐き気におそわれるという繰り返しでした。あまりに辛かった私は「大変なのは私。もうやりたくない。アレルギーじゃないお母さんにはわからないでしょ。」強い口調であたりました。

すると母は、こう言ったのです。「アナフィラキシーショックを起こしてみうが病院に運ばれた時、あぶないところだったと先生に言われて目の前が真っ暗になったの。これから先、みうの命を守れないんじゃないかって不安で不安で仕方なかった。でもみうを助けてくれた先生が、みうちゃんの将来のためって毎日私にアドバイスをしてくさっ

たの。その言葉で、ああみうにはちゃんと未来があるんだって強くはげまされた。だから、しっかりみうが強く生きていけるように、できることをやろうってお母さん決めたのよ。」

母の言葉を聞いて、今まで自分の辛さばかり考え、甘え続けていた自分の姿がいくつも頭に浮かび、情けなくなりました。

緊急搬送されたあの日、頭がもうろうとする幼い私を不安にさせまいと、ただただ抱きしめ、“大丈夫、絶対大丈夫だからね”とはげまし続ける母の姿だけがうっすらと記憶に残っています。私が生まれたその日から、母は私以上に戦い続けていたんだと初めて気づきました。他の人が食べられる物を私は食べられない。でもそれが私。他の人と違ったっていい。これだけの大きな力で私は支えられているんだから。そう思うと今まで悩み続けてきた自分がちっぽけに思えました。

人は違いを恐れます。皆さんも本当の自分をつい隠したり、偽ったりしてしまう時はありませんか。自分にないものをうらやんだり劣等感を抱いたりしたことはありませんか。考え方、外見、体質、性…違いを受け入れられず悩み苦しんでいる人は世の中にたくさんいるのではないのでしょうか。母はまるごとそのままの自分こそかけがえのない存在なのだというのを私に教えてくれました。そして私は、自分の存在を大切に支えてくれる人がいることも知りました。それは誰にでもあてはまるたしかなことです。私はこれから先、自分を認め、自分自身に胸を張って生きていきたいと思っています。ありのままの自分を受け入れて。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を自分と向き合うすべての人に届けたいです。人との違いに悩みを抱える経験は誰にでもあるはずです。私はこの主張を通して、ありのままの自分を大切に支えてくれる人が誰にでもいるということを実感しました。私の発表から自分を支えてくれている人の存在に気づき、ありのままの自分を受け入れられるきっかけになればうれしいです。誰もが「これが私！」と胸を張って生きられる世の中を私は願っています。



優良賞

希望のある社会へ

奥州市立東水沢中学校 3年

藤 代 菜 央 (ふじしろ なお)

みなさんは、どのような社会で暮らしたいですか。平和な社会。差別がない社会。私は、たくさんの個性や思いと共に生きていける社会がいいなと思います。

しかし世界では、そんな願いとは正反対の出来事が起こっています。アメリカでは、罪のない黒人の男性が警察官から暴行を受け、命を落とすという事件がありました。その背景にあったのは、黒人に対する偏見です。この事件に対し、世界中からたくさんの批判が集まり、抗議活動も起こりました。みなさんもいろいろなことを感じ、考えたと思います。驚き。怒り。なぜ偏見は生まれるのか。平等とは何か。私たちはどうすればいいのか。

道徳の時間には個性について考え、そこでLGBTについても学びました。私はそれまでそのような方たちを、「普通」とはかけ離れた人たちだと勝手に思い込んでいました。しかし、「普通」の基準は人それぞれで、たくさんの「普通」があっていいのだと考えるようになりました。テレビでも、「個性を認められる社会」という話題を目にする機会が増え、社会としても「多様性を認めていこう」という動きが進んでいるのを感じます。これはとても素晴らしいことだと思います。

しかし私は、自分の中にあった小さな違和感を思い出しました。そしてそれはどんどん膨らみ始めました。「言いたいことはわかるけど何かが違う……。」私は「認める」という言葉の意味を調べました。すると違和感の理由が見えてきました。「認める」という言葉がもつ「許可する」という意味。私には、「個性を認める」という表現が、誰かが上からものを言っているように感じられたのです。もちろん、その言葉にそんな意図も悪意もないことはわかっているのですが、一度感じた違和感は簡単には消えません。「認める」という言葉を使う私たちの意識の底に、自分が優位であるという無意識の差別があるのではないかと。私はこのことを何人かの友だちに話してみました。す

ると「ああ、確かに!」「それ、私も思ったことある!」という言葉が返ってきました。うまく伝わるか不安で少し緊張していた私は、友だちの反応に、「わかってもらえた!」と嬉しくなりました。

私はたくさんの個性や思いと共に生きていける社会の実現を願っています。個性を「認める」のではなく「受け入れる」。それができれば、私たちが生きる社会は、誰もがなりたいたい自分、いたい自分でいられる社会へと変わっていくのではないのでしょうか。しかし、みなさんの中には、「認める」と「受け入れる」に大きな違いはない、それは印象や感じ方の違いだと思う人や、「受け入れる」ことはそう簡単なことではないと思う人もいます。私も、今の自分に自信はありません。また、これからさまざまな人たちに会ったとき、自分との違いに驚き、戸惑うこともあると思います。だからこそ私は、無意識であっても、自分の中に、人を差別するような感覚がないかを問う姿勢を、持ち続けなければならないと思います。私がそれを忘れず、「受け入れる」心を持つことができたなら、驚きや戸惑いも、差別や偏見ではなく発見や新たな出会いの喜びに変わるのではないのでしょうか。「受け入れる」とは、その人の思いや主張を同じ立場で聞き、一つの考えとして受け取ること。そして、両者にとってプラスになること。決して、誰かが「良いでしょう」と認め、判をつくものではありません。

今私が暮らす社会は、私にとっては悪いものではありません。しかし、私が思う以上に、身の回りには小さな差別があふれ、誰かにとっては過ごしにくい社会なのかもしれません。そこに目を向けなければ、いつまでたっても変わらない。未来の社会は私たちが作るのです。小さな違和感を声にして、共に考え、意見を交わし、誰もがなりたいたい自分、いたい自分を見つけ、それを受け止める環境がある社会へ。そんな希望のある社会と一緒に目指しませんか。

○ この作品を書いたきっかけはなんですか？

その時読んでいた本のなかに、「常識を疑う」ことについて書かれたものがあり、何気なくテレビを見ていたら、「あれ?」と違和感を持ったことがきっかけです。しかし、それを誰かに話すことはなく、今回、せっかくだからと、なんとなくという軽い感じではありましたが、友達に話してみました。本当に小さな違和感でしたが、その違和感を大切にすること、そして、それを誰かに話すことの大切さをとて感じました。



優良賞

弱いからこそ

釜石市立大平中学校 3年

菅原 小雪（すがわら こゆき）

私の兄は重度の障害者です。一人では何もできません。言葉も通じないし、話すこともできません。そのかわりに叫んだり、暴れたりします。静かにしなければいけない場所でも静かにすることはできません。

もし、これがあなたの兄弟だったらどんな気持ちになりますか。

人が多い所や注目を集めやすい場所に行くと、すれ違いざまにちらっと見られたり、差別的な目つきだったり、自分に向けられているわけではなくても、恥ずかしくて怖くて、一緒にいるのが辛くなることがありました。こう思う障がい者の家族の方は、きっと私だけではないでしょう。

家の中では兄優先のことが多いため、我慢を強いられることもあります。世話でいっぱいいっぱい母を独占されている気がして寂しくて、不満がたまっていく一方でした。

時には「兄がいなければ私だけを愛してくれたのかな」と思うこともありました。なのに、いつも笑顔で寄ってくる兄。例え私のことを家族と認識してないとしても、大事な存在として好きでいてくれている気がしました。そんな時、感じる罪悪感。その純粋な笑顔は嬉しくて、自分の愚かさにも苦しくなるものでもありました。

当然、親にも大きな負担がかかっています。母の辛そうな顔を何度も見てきました。私と違って、世話も家事も仕事もこなす母。私の何倍も辛いに違いありません。そんな母の原動力は、兄と私の二人の子供を守ることだと思います。母には感謝しています。

皆さんは、障がい者の家族がどんな気持ちでいるか、考えたことがありますか。こう話すのは、もっと「障がい者の家族」の日常を想像して欲しいと思ったからです。

ある日、私は心に触れる言葉を聞きました。

「強い人が頑張らなければいけない、でも、果たして強いのか。そんなことはない。その人よりは強いってただだよ。障がいを持っている人よ

りは強かった。だからその人が守らなければいけなかった。でもその人だって弱いよきっと。」

家族に障がい者がいた、ある人の言葉です。「分かってくれる人がいる」・・・私はこれを聞いて、ふっと肩の荷が下りた気がしました。これまで、家庭の悩みは誰にも相談してきませんでした。辛い気持ちより、悩みを打ち明けた時の反応が怖かったのです。でも、その言葉で、安心感が生まれました。悩む事実は変わらなくても「弱い人を支えるのも弱い人だ」という理解があるだけで、心は軽くなりました。

目に見えることだけに頼るのも違うし、特別視して欲しいとも思ってはいません。でも、変わらぬ苦しみがあったとしても、誰か一人の理解で、何かが変わると思うのです。私が一つの言葉で心が軽くなったように。

障がい者を支えたい、助けたいという気持ちは間違いではありません。でも、その家族について考えてみて下さい。他者の痛みは想像することでしかできません。障がい者の家族の悩みともなると更に考えにくいと思います。実は私も、授業で視聴覚障がいを持つ方々のことを勉強した時に、その家族のことを想像することができませんでした。だからこそ、知ること、考えることに意味がある気がします。

もし、皆さんの家族に障がい者がいたらどんな生活になるか想像してみてください。何を考えますか。障がい者を差別しないだとか、家族の悩みを聴いてあげるだとか考えた方は人それぞれでいいと思います。そこで生まれた考えが、その考えから変わる行動が、誰かの救いになるはずです。強そうに見えても、どこかに弱さは隠れているものです。そして、弱いからこそ、私たちは支え合える、この言葉に勇気をもらって、私はこれからも、兄や家族と関わっていきます。

○ この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品は「こんなに苦しいのにどうして障がい者の家族には目を向けてくれないんだろう」という一つの不満を帯びた思いから生まれました。声を掛けていただいた時に、「書こうかな」と思ったのは、「もっと自分を見てほしい」という気持ちの表れだったのかもしれませんが。



入賞

振り返れば、わたし

盛岡市立上田中学校 3年

藤原 麻央 (ふじわら まお)

静けさが部屋を満たす深夜1時、私は眠れずいました。朝が来ることを考えると、襲いかかる不快な緊張感。「もう嫌だ……。」そんな私を救ったのは、私でした。

中学2年生の春、私がずっと恐れていたイベント、クラス替えがやってきました。仲の良い友達と離れ、名簿にはよく知らない名前ばかり。友達作りにも出遅れて、気付けばひとりぼっち。私にとって教室は針の筵でした。

ある日、私がクラスでの苦悩を友達に打ち明けると、彼女は笑いながら、

「麻央もうちのクラスに来ればいいじゃん。結構楽しいよ。」

と言いました。私は彼女の発言に苛立ちを覚えしました。どうして笑っていられるんだろう。私はこんなに辛くて、苦しいのに。その日から、誰にも相談できなくなった私はどんどん追い込まれてきました。

行き場のない感情を、私は全て日記に書き出すことにしました。「二人組をつくるときにいつも余ってしまう。消えたい。」「朝が来るのが怖くて毎晩眠れない。」「教室にいるのが怖くてたまらない。もう限界、助けて。」毎日増えていく、悲痛な心の叫び。でも、今までずっと閉じ込めていた気持ちを日記に吐き出すことで、私をぎゅっと締めつけていたものがほんの少し緩んだように感じました。日記を続けていくうち、少しずつ心に余裕ができ、笑ったことや些細な楽しかったことにも目を向けられるようになりました。「最近数学の授業が楽しい。今日は居眠りしなかった。偉いぞ私。」「先生の服に虫がとまった。先生の反応が面白くてみ

んなで笑っちゃった。」「今日の部活きつかったけどやり切れた。来週の大会が楽しみ。」他にも、嬉しかった言葉や笑ってしまった友達の行動、天気良くて幸せな気分になったこと。いつもはなんとなく忘れてしまうような小さな幸せが、日記にたくさん綴られるようになりました。悲惨なことばかりだった私の日記は、いつしか明るい言葉で溢れていきました。

今日までの日記を見返すと、私は毎日、笑ったり、悩んだり、喜んだり、時々泣いたりして、確かに生きていたことに気が付きました。ありきたりな毎日の中で、すごく特別なことに気付けたような気がしました。

今、くじけそうになるほど大きな壁に直面している人、絶望の淵に立っている人。そんなあなたにも、振り返れば、たくさんの困難を乗り越えて日々を積み重ねてきたあなたがいます。先が見えないほど真っ暗な日でも、きっと過去の自分が、今の自分を応援してくれているはずです。「あのとき乗り越えられたから大丈夫。」「きっとまた楽しいことが待ってるよ。」どこからともなく聞こえてくるわたしの声に、これまで何度も救われてきました。この先、朝が来るのが怖くなることも、どうしようもなく苦しい夜も、きっとまたやってくるでしょう。でも大丈夫。積み重ねてきた日々を振り返れば、そこには最強の救世主、私がいるから。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

悩みを抱える全ての人に届けたいです。誰もわかってくれなくても、全てが嫌になっても、振り返ればそこにはいつも一番の理解者であり、救世主であるあなたがいる。一日も欠かさず生きてきた、素晴らしいあなたが。この主張を通して、そんなメッセージを伝えられればと思います。様々な感情を抱えて苦しい思いをしている人が、少しでも楽になれるように。眠れない夜が、少しでも短くなるように、この主張を届けたいです。



入賞

「知ること」から始めよう

矢巾町立矢巾北中学校 3年

川 向 杏 奈 (かわむかい あんな)

みなさんは、SDGsを知っていますか？最近、テレビ番組でも取り上げられる機会が増え、聞いたことがあるという人も多いと思います。SDGsとは「持続可能な開発目標」を意味し、2030年までに世界中にある環境問題、差別、貧困、人権問題といった課題をみんなで解決していこうという計画・目標のことです。

私は福祉委員会の委員長をしています。個人的にも関心のあったSDGsを身近な人達にもっと知ってもらいたいという思いから、委員会活動の中心にSDGsを据えることにしました。まず手始めに、学級毎の「SDGsに取り組みポスター」を作成しました。これは17項目の中から学級で1つ選び、その目標の達成のために学級として具体的にどんな取り組みをするのかを記入するものです。

また、全校生徒にSDGsがどれくらい認知されているのかを知るためのアンケート調査も行いました。「知っている」と答えた人、また「SDGsが目指すもの」を3つの選択肢から正しく選ぶことができた人は、ともに約40パーセント。私の予想をはるかに下回る結果でした。

SDGsについての理解を深めてほしいという思いで行っていた活動でしたが、自分が思うような手応えは感じられませんでした。クラス目標を全員が理解していなかったり、寝る間を惜しんで作ったアンケート結果を載せた広報も、しっかり読んでもらえている実感がわかなかつたりと、こちらの思いがなかなか伝わらないことがっかりする日々でした。

そんな中、学校でSDGsの授業が行われました。先生はパンフレットを用いて世界の状況を説明した後、2030年までに目標を達成しないとどうなる

のか、ビデオを見せてくださいました。そこには、近未来のニュース番組の様子が映し出されていました。アナウンサーは「今日は気温が40度以上になるので、不要不急の外出は避けてください。」と話し、豊かな緑が消え砂漠が広がっていく光景や、亀裂の入ったアスファルトの道路、氷河が溶け海面が上昇する様子などが次々と映し出されます。現実のものではないとはいえ、実際に映像で見たことの衝撃は大きく、私は画面に釘付けになりました。

そんな中、ふと周りに目を向けてみると、少し眠そうな表情の人々もいる中、私と同じように画面を食い入るように見つめる人達の顔がありました。初めの頃と明らかに表情が違います。心を動かされたことが分かる表情でした。そこで気づいたこと。それは、「物事は知ることによって興味がわく」ということです。人は自分の知らないことに興味をもつことはできません。私が一生懸命やっていたつもりの委員会活動が空回りしていたのは、SDGsについて多くの人が知らないことが大きな理由の一つだったのではないかと気づいたのでした。

誰かの一方的な価値観の押しつけでは、人の心は動きません。今回のことを通して私は早速、2学期にSDGsについて全校生徒に知ってもらおう機会を作ろうと考えました。

2030年なんてまだ先のことと思うかもしれませんが、そこまであと9年。私たちは24歳です。それまでにどんな手法で、私達の住む社会の課題を解決していけばよいのでしょうか。

まずは、「知ること」から。ここがすべてのスタートです。皆さんも自分の未来のための一歩を、一緒に踏み出しませんか？

○ この作品を書いたきっかけはなんですか？

福祉委員長になってSDGsを校内に広める取り組みをしていたときです。そのことに興味がある場合とない場合、知っている場合と知らない場合で、捉え方も全く違ってきます。SDGsに限らず、どんな物事もまず「知ること」から。私はSDGsをたくさんの方々に知ってもらい、今の世代にとっても、これから生きていく世代にとっても幸せを感じられる社会になってほしいという思いで、この作品を書きました。



入賞

笑顔を力に

北上市立北上北中学校 3年

小田島 芽 吹（こだしま めぶき）

「もう、あつつい！」

「暑くてイヤなるよね！」

連日の猛暑日。すっかり私たちはマスクをして日常生活を送ることが当たり前になってしまいました。そう、令和3年の夏を迎えても、今なおコロナは収束するどころか、感染者数が減る気配がありません。そのことに、驚きはするものの、どこかで感覚が麻痺してしまっているような感じがします。それが、私だけではなく、世の中全体も疲れとストレスの中で疲弊しているように感じるので。このことを憂うのは、私だけでしょうか。

もちろん、マスクはウイルスから自分を守るためと、自分の周りの人たちを守るために必要です。ただ、マスクをしていると、顔の表情が半分しかわかりません。元気いっぱい明るい私のクラスでさえ、心なしか、どんよりとして疲れているような雰囲気に包まれる時があります。

マスクをしていても笑っている、笑顔でいられるような状況にしたい。と私はいつも思います。私は人を笑わせること、笑顔にすることが好きです。なぜかという、人が楽しそうにしているのを見るのが好きだからです。

さまざまな行事が延期や中止になる中で、今年の体育祭も延期になりましたが、感染症対策をして開催することができました。私にとっては中学校最後の体育祭でした。最高学年としてももちろん気合いが入りました。中でも今年初めて、北北ソーランという演舞に取り組みました。これは、コロナに負けず地域に笑顔と元気を届けたいという願いのもと挑戦したものです。限られた短い期間で仕上がるかどうか不安もありました。しかし、何度も踊っていくうちにきついながらも仲間と笑顔になっている自分がいました。さまざまな制限がある中でも、新しいことにチャレンジし、みんなで作り上げた一体感。暗くなりがちな日常を忘れるくらい笑顔にならずにはいられませんでした。

当日会場で、私たちのソーランを見た、家族のうれしそうな笑顔が忘れられません。

私たちは、何かに一生懸命夢中になれる時、楽しさや喜びを感じます。マスク越しであろうとも、仲間と心を通わせ、一生懸命何かに打ち込んで過ごすことがどれだけ、生きているというエネルギーとなるかを実感できました。

父がよく私に言う言葉があります。それは「結果は一瞬の出来事、努力は一生の財産。」というものです。私はこの言葉が好きです。いろいろなことがあるけれど、それをどう受け止め、どんな気持ちで向かっていくかで、それが一生の宝になる。このような世の中だからこそ、どんな時も私は、笑顔や笑いを忘れない、人と人を明るくつなぐそんな存在でありたいと思います。

コロナが消滅する日はこないかもしれません。当たり前だったことが当たり前でなくなり、当たり前でなかったことが当たり前ようになっていく。多様な状況の中で、その時その時、何が大事なのか、どう生きるかを考えていけるようになりたいです。

目に見えないウイルスによって、命が蝕まれることと同様に、人と人との距離が本当に離れてしまうこと、人の心までもが蝕まれてしまうこと。こんなに悲しいことはないと感じます。「笑顔」はきっと、コロナで沈んだ心を癒す「薬」になると思います。

目の前の友が、家族が、いつも笑って元気でいてほしいです。大切じゃない人なんていません。みなさんも、誰かのことを笑顔にできるような生活をしてみませんか。嘆くばかりでなく、大人も子供も、冷静さと思いやりと想像力で、この先起こるさまざまなことを乗り越えていきましょう。

明るい未来、明るい世界を思いながら！

笑顔を力にかえて！

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

コロナ禍で暗い話題が多い世の中に、何か明るい話題・前向きな思いを発信したいと思い、作品を書きました。笑顔はきっといろいろな人々を癒す「薬」にも、生きていくエネルギーにもなると思いました。今を懸命に乗り切ろうとしている人、辛いことばかりで挫けそうになっている人、なかなか元気が出ない日々を送っている人など、たくさんの人に届けたいです。私もあなたも笑顔になることで、誰かを元気にすることができるとは思えない、と。



入賞

思いやりの力

一関市立桜町中学校 3年

岩本 智陽（いわもと ちはる）

思いやりって、何だろう。

もし、そう聞かれたら、あなたは何と答えますか。私の体験を通して、あなたも思いやりについて考えてみませんか。

三者面談が終わり、教室から出ると部活の友達が私を待っていました。活動時間は過ぎて、もうみんな帰ったはずですが。

「どうしたの」

と私が尋ねると、友達はすっと手を差し出して、「智陽ちゃん、消しゴム忘れてたよ」と言いました。

「明日でも良かったのに」

と言うと、

「だって、消しゴムがないと困るでしょ」と友達は笑って答えました。ちょっとしたことですが、本当にうれしくて、受け取った消しゴムを特別なものに感じました。

自分のことでいっぱいいっぱい、誰かを思いやるなんて難しいと思っている人でも、私のような経験をしている人は、案外いるのではないのでしょうか。思いやりの心は見えませんが、思いやりの心を「形」にすることはできるかもしれません。そして、それはありふれた日常の中にあるのではないのでしょうか。私が困るだろうと、わざわざ消しゴムを届けてくれた友達のように。

もう一つ、私が思いやりについて考えるきっかけとなった体験があります。私の家族は、夏になると祖父母の家に行き、朝市の手伝いをしています。小学1年生になった妹も、はじめて朝市に参加することになりました。祖母が育てた花をみんな花束にしていると、妹が、売り物にならない花を集め出しました。そうして小さな花束をつくり、段ボールに手書きで「花たば 50 円」と書きました。母と私は、

「かわいそうだけど、あんな小さな花束じゃ売れないよね。」

と話していました。ところが、妹の小さな花束は、ひとつ残らず売れたのです。どうして、あんな小さな花束をお客さんは買ってくれたんだろう……私は不思議で仕方ありませんでした。もしかしたら、お客さんは花束が欲しかったわけではなく、売れるたびに大喜びする妹の笑顔が見たいという思いから買ってくれたのかもしれない。祖母の手伝いをした女の子が、一生懸命作った花束だから買ってくれたのかもしれない。そう思うと、私は温かい気持ちになりました。

誰かから思いやりのあることをされてうれしい気持ちになったり、誰かの思いやりの姿を見て温かい気持ちになったり、思いやりの力はすばらしい！もし、思いやりが連鎖したら、どうなるのでしょうか。こんな話があります、来日したけれど宿泊先がなくて困っていた外国の方を、大変だろうからと、ある家族の方が泊めてあげました。数年後、世界中でコロナが広がり、日本ではマスクが不足するという事態が起きました。そのとき、あの外国の方が、日本人が困っているだろうと、マスクを送ってくれたというのです。この話を聞いて、私は思いました。一人の思いやりがつながれば、多くの人を幸せにできる、と。

私が受け取った友達の思いやりを、今度は私が誰かに届けば、思いやりの輪が広がります。それが、すぐ形にならなくても、いつか輪が広がっていくと信じています。

あなたも、思いやりの心を届けてみませんか。ささやかな日常の中にある小さな思いやりを目を向けてみませんか。小さな思いやりが、大きな力となって、問題解決の糸口になるかもしれません。

○ この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この主張の練習中にもたくさんの友達、先生が私を支えてくれました。とてもうれしく、ここにも思いやりの心があふれていました。また、この主張をするにあたり、日常に目を向けてみました。登下校中に信号の無い横断歩道があり、そこで止まってくれる車の運転手さんや、その運転手さんにお辞儀をする人たちは、思いやりの気持ちから行動しているのだと気付きました。これからも思いやり気づき、たくさんの人に思いやりを届けられる人になりたいです。



入賞

本当の豊かさ

一関市立藤沢中学校 3年

近 江 美 咲 (おおみ みさき)

「日本は、豊かな良い国だね。」

ベトナムからホームステイに来た彼らは、皆同じことを言います。私の祖父母の家には、毎年ベトナムの大学生が2週間ほどホームステイに訪れていました。ベトナムのことをたくさん質問する私に、おいしい物や好きなところをなど、自分の国のことをとても楽しそうに話してくれました。しかし、みんな最後には、「でも日本はもっと豊かでよい国。日本に生まれたかった。」と言うのです。物が豊かにあるからだろうと思い、私は深く考えることもありませんでした。

3年前の秋。その年、ホアンさんという留学生と印象的な出会いがありました。日本に来てすぐの時、彼女は、私が住んでいる地域を見てまわりたいと言いました。特に珍しいものも、見せたいと思うような所もないと思っていた私に、彼女は「すごく楽しい。日本はやっぱいいね。山も空気も本当にきれい。」と喜んでくれました。「日本の紅葉はすごい。道路にごみもなくきれい。」と言いながら写真を撮る様子に、私はなんだか誇らしい気持ちになりました。

その後も、彼女の滞在期間、二人でベトナムと日本の違いを話しました。「日本はイメージしていた通り、みんな順番もしっかり守るし、誰も置いてあるものをもっていったりしない。」そんなことは当たり前だろうと思う私に、ホアンさんは、「日本は人も車も、きちんと列を作って並ぶことができる。」「日本人は、次に使う人のことを考えて公共施設をきれいに使っている。これってとても素晴らしいことなんだよ。」と話してくれました。良いところを見つけるのがとても上手な彼女と過ごすうちに、私たちにとっての当たり前や普通は、実はとても素晴らしいことなのだと思うようにな

りました。

「日本は豊かな良い国」

彼らが言ってくれた豊かさとは、物の豊かさだけでなく、自然の豊かさだったり、人との接し方を含めた心の豊かさだったりするということ。そして規則やルールは守るという人として当たり前の姿勢のことであると気づいた、貴重な出会いとなりました。

さて、私たちの社会は、彼らのイメージ通り、本当に「豊かな良い国」と言えるのでしょうか。公共の場で大声で話したり、ルールを守らず、禁止されていることを行ったりするマナーの悪さ。相手の気持ちを考えない、日本人らしい心の豊かさとはかけ離れた、優しさのない言動。

今年の夏、東京オリンピックを縁の下で支えた日本のボランティアやスタッフの優しさや礼儀正しさが海外でも称賛されました。私は、せっかく海外の人たちが「日本は豊かな国」と思ってくれるそのイメージを大切にしたいのです。当たり前にある日本の良さ。それは、街並み、自然、人としての姿勢や人のことを考えたあたたかい心。ルールを守り誰もが安心して生きていける社会のことだと思うのです。

自分の地域や国の良さに、もっとたくさんの人が気づき、私たち自身が日本らしさを大切にすべきだと思います。実は身近な生活の中に散りばめられている日本の良さを、ひとりひとりが守り続けていくことが大切です。「日本は豊かな良い国」私たち自身がそう思えるよう、私は誰もがルールやマナーを当たり前を守り、安心して暮らせる心豊かな社会の一員になっていきたいです。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、日本の良さや自分の住む地域の良さに、なかなか気づけずにいる人に、この主張を届けたいです。「日本は豊かな国である」と海外の人が持つ日本のイメージを守り、日本人らしい礼儀正しさや心の豊かさ、日本の素晴らしい自然や街並み、文化などを大切にしていきたいと思います。皆さんが、日本の良さをもう一度見直すきっかけになると良いと思います。



入賞

支え合って認め合って

大船渡市立第一中学校 3年

金 野 紗 弓 (きんの さゆみ)

みなさんの得意なことは何ですか。私が得意なのはピアノを弾くことです。では、みなさんの苦手なことは何ですか。私にとって苦手なのは掃除や片付け。よく母にしかられます。人は皆、得意なこと、苦手なことがあります。それは、当然のことであり、一人一人の個性でもあります。

私の姉は自閉症です。支援学校に通っています。姉は、人とは少し違った特技をもっています。それは、車のナビにある数百もの音楽の順番を、全て記憶しているということです。聞きたい曲をリクエストすると、ほんの数秒で流してくれます。これは、私には到底無理な技ですが、姉はいとも簡単にやってみせます。しかし、そんな姉にも苦手なことがあります。例えば、字を丁寧に書くこと。靴下を上手に履くこと。そして、誰かに自分の思いを伝えること。

ある日のことです。私たちは家族でショッピングモールに出かけました。私と母が洋服を見ている時に、姉が突然、暴れ出したのです。言葉にはなっていませんでしたが、大声も発していました。長い時間の移動や外での行動に飽きてしまったのか。いずれにしても人がたくさんいる中で姉の行動に私はとても恥ずかしく、また、怒りも感じました。

「どうしてお姉ちゃんはこんなことをするんだろう、みんなが見ているのになあ・・・」

と行き場のない気持ちになりました。その時ふと両親に目をやりました。父母は、慌てる様子もなく「大丈夫だよ。」とごく自然に接していました。私はその様子を見て、「どうしてこんなふうにできるのだろう。」と驚きました。と同時に、姉のことを恥ずかしいと感じてしまった自分を責めました。周りの目を気にする前に、私は姉のことを大切に

思うべきだったのです。私にお菓子を半分こしてくれた時の笑顔。洗濯物をたたんでくれる小さな優しさ。お願いや挨拶の仕方などコミュニケーションスキルを頑張って覚えようとしている必死な姿。そんな大好きな姉のことをもっともっと大事に思うべきだったのです。あの時、こう言ってあげれば良かった。「お姉ちゃん、どうしたの？大丈夫？落ち着こう。大丈夫。安心して。」私は自分を今の社会に置き換えてみました。今の社会はどうでしょうか。お互いを支え合う社会になっているでしょうか。正直なところ、私はまだなっていないと思います。マスコミなどの報道を見ると相手の欠点ばかりを見つけ、自分が優位に立とうとする人がたくさんいるように思えるからです。社会にとって互いのことを理解し、尊重することが大切です。私にはそれが欠けていました。考え方が違う、得意なことが違う、好きなものが違う、そんなちょっとした違いにとらわれ、以前の私のように相手を非難したり、否定したりする人がこの社会にはたくさんいます。そんな違いを個性ととらえて認め合える人が増えれば、私達にとっても障害をもつ人にとっても、誰にとっても温かい社会になると思います。実際に、私は、姉に「どうしたの？」「何したい？」と自然に声をかけるようになりました。

違いは個性です。お互いの個性を認め合いたい。今、あなたの目の前にいる人と自分の違いを受け入れましょう。これからも、私は姉の得意、苦手、喜び、悲しみすべて抱きしめ共に成長していきたいと思っています。

○ この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私はまず自分自身が相手を認めて尊重できるように、たくさんの人と交流して視野を広げていきたいと思っています。そして、考え方、性格、好きなことなど自分との違いがある人といろいろな時間を共にして自分自身の成長へつなげていきたいです。これから私は性別、国籍、障がいの有無などの違いにとらわれず、誰もが楽しめ、心を通わせられるような場所を作れるような仕事に就き、たくさんの人を笑顔にする人生を歩みたいです。



入賞

救える命は必ずあるから

遠野市立遠野西中学校 3年

藤原 真結（ふじわら まゆ）

私は動物が大好きです。動物を見ると、そのかわいさに自然と笑顔になってしまいます。家では猫を2匹飼っていて、とても愛らしく、大切な家族の一員だと思っています。

この子たちは、元は捨て猫でした。親猫もそばにおらず、すっかり弱り切っていました。

「殺処分。」皆さんも一度はこの言葉を耳にしたことがあると思います。2019年度の殺処分数は、犬が5,635匹、猫が27,108匹。殺処分される命の8割は猫が占め、そのうち5割はまだ離乳前の子猫でした。

この事実をあなたはどのように思いますか。生まれたばかりの子猫が、親猫や人間の愛情に触れることなく処分されていく現実。

私は、「なぜ同じ生き物なのに人間はペットを見殺しにするのだろう」と思い、心が痛くなります。どちらも親からもらった大切な命なのに、と。

きっとみなさんも、子猫の顔や鳴き声を想像したら、重い気持ちになるはずです。

それなら、なぜ捨て猫や捨て犬はなくなるのでしょうか。

それは、ペットを家族として、愛情を注いで世話をしている人がいる一方で、罪のない動物たちを、次々に捨てている人たちもいるからです。「思ったより凶暴だった」「かわいくなかった。飽きた」「病気になって面倒を見切れない」「家で飼えなくなった」など、その理由は様々です。どれも人間の勝手な都合でしかありません。

「他人にやられて嫌なことは自分もしてはいけない」とよく言われます。それは、相手が動物の時も言えることではないでしょうか。人間に置き換えて考えてみてください。「覚えが悪いから捨てる」「外見が思っていたものと違っていたから捨てる。」人間だったら絶対にやってはけないこと、ありえないことです。しかし、人間は動物相手にそ

ういうことをしているのです。殺処分問題の根本には「思い通りにならないなら切り捨てる」という考えがあるように思います。果たしてそれでいいのでしょうか。

厳しい問題もある中で、何とか救える命を増やそうと努力をしている人たちもいます。

皆さんは、「譲渡会」というものを知っていますか。これは、保護された犬や猫をボランティアの方などが、赤ちゃん猫が離乳するまで、または猫や犬が人に慣れるまでお世話をし、そのペットを新しい家族に渡す会のことです。引き取り手がすぐに見つかるわけではなく、お世話することにも大変な労力がかかります。それでも命をつなぐために活動しているのです。

そして、犬や猫を引き取る側もまた、覚悟を持って家族に迎え入れているはずです。

一つの命を救うために、多くの人たちが知恵を絞り、協力し合っていることもまた事実です。直接関わることができなくても、「保護の助けとなれば」と、寄付をとにかく形で支えてくれている人たちもいます。

安易に切り捨てては解決できない問題があること。命には覚悟を持って向き合うことが大切だということ。お互いにとってベストなやり方を真剣に考える姿勢の大事さ。捨て猫や捨て犬たちが、多くのことを私に教えてくれました。

私はもう、抵抗することもできずに命を落としていくペットの姿を見たくない。

すべての人へお願いです。

不幸な命をなくすためにも、「自分には関係ない」と思わずに、何か行動を起こしてみませんか。

○ この作品を書いたきっかけはなんですか？

本でペットの殺処分の現状や、それを減らす取り組みについて知ったことをきっかけに、この主張を書こうと思いました。生まれて間もない小さな命が、愛情を知らずに消えていくこと。毎日動物が送られて処分しているところが多い中で、殺処分数ゼロを実現した地域もあること。そして、全ての人が関わることで、人間も動物も共に幸せに暮らせる社会に近づいていけること。これらのことを多くの人に知ってもらい、命の尊さについて考えるきっかけになればと思います。



入賞

ひとりでも多くの命を

宮古市立川井中学校 3年

松 草 奏 重 (まつくさ かなえ)

もし、目の前に倒れている人がいたら、あなたなら、どうしますか？多くの人は、119番に通報し、消防署からの助けが来るのを待つと思います。

「消防の仕事」と聞いて真っ先に思い浮かぶのは、ニュースで報道される、消火活動や救助活動です。しかし、消防士の仕事はそれだけではありません。例えば、私の通っている学校やスーパーにある消火器や消火栓の点検は、消防士の方がしています。防災に関わる啓発運動として、幼児から大人まで幅広い年齢層に対して、防災教室を開くなど、仕事は多岐にわたります。私も、保育所の時に消防署で体験させてもらったことを、今でも覚えています。

そうです。消防士という仕事は、幼いころから、気づかないうちに、私たちの生活に深く関わっているのです。それに気づいてから、私は次第に消防士という職業に興味を持つようになりました。

私は中学1年生の時、AED講習を受けました。最初は「本格的で、何だかカッコいいな。」という面白い事を体験できる期待に、ワクワクしていました。しかし、実際に消防士の方々に教えられ、体験してみると「こんなに大変なことをするんだ。」という驚きと「命って簡単には救えないんだ。」ということに身染みて感じました。予想していたものとは全く違い、助ける役目の私の方が息切れしてしまうほど、体力を消耗しました。周りの安全を確認すること。倒れている人に話しかけ意識の有無を確認すること。周りの人に、助けを求めること。呼吸をするために、気道を確保すること。AEDが届くまで、ずっと同じペースで胸骨圧迫を続けること。AEDを使う際には、離れるよう大きな声で呼びかけること。救急車が来るまでに、再度、胸骨圧迫をすること…同じグループの人たちも、体力的に苦しくなり、顔が真っ赤になりました。

さらに、胸骨圧迫の途中で、人の肋骨を折ってしまうことがあると聞きました。たとえ肋骨が折れても心肺蘇生をするためには続けなければいけないと知った時、自分が誰かの骨を折ってしまう場面、その感触を想像し、怖くなりました。救命は、ドラマのように「カッコいい」だけのものではない。勇気を出さなければ、救える命も救えないのだと知りました。

しかし、苦しさとは別に学んでことがあります。それは、中学生の私でも、正しい知識があれば、消防士のように救える命があるということです。前の私だったら、心肺蘇生を行うことは、絶対にできなかったと思います。人を助けることは、とても勇気のいることです。けれども、消防士の方に正しい知識を教えてもらった私は、勇気を持って人を助けることができます。保育所の頃から、自然に人を助ける方法や、災害時に身を守る方法を教えてくれた地域の消防士の方々に対し「ありがとう」という気持ちが込み上げてきました。そして、保育所から現在までの消防士の方々との出会いと体験を通じて、私は将来、消防士を目指したいと考えるようになりました。

現在は昔より、自然災害が多く起きています。宮古市でも、たくさんの避難警報が出ています。日常から、災害や救助活動に対する意識を高めることが必要になってきています。消防士になり、人命を守るために必要なことを、たくさんの人に知ってもらい、お互いが助け合えるようになるための救助の連鎖を作っていきたいです。ひとりでも多くの命を救うために。

最後に、もう一度質問をします。もし、目の前に倒れている人がいたら、あなたなら、どうしますか？今の私は、こう答えます。「正しい知識と勇気を持って、必ずこの手で目の前の人を救います。」

○ この作品を書いたきっかけはなんですか？

私がこの作品を書いたきっかけは、AED講習や職場体験を通して実際に自分が体験したことや学んだことなどを多くの人に知ってもらい、消防士という職業をより身近に感じて欲しかったからです。人命救助のために中学生の自分達にできることはないかを考える人が増え、自然に助け合いの輪が広がっていくことを願っています。



入賞

道の選択

田野畑村立田野畑中学校 3年

熊谷 珠奈 (くまがい じゅな)

「ちょっと待って!!

田野畑と盛岡の中学校って、こんなに違うの!?)

私が転校してきて一番に感じたことでした。挨拶の声の大きさ、整列の静けさ、先生の話しを静かに聞いている。そして、何よりも驚いたことがあります。

ええー!?廊下に…寝転がっている人、誰もいない!?

ええー!?壁とか…めっちゃきれいなんだけど!!

今となって考えてみれば、挨拶の声の大きさも、集会などで静かに整列できることも、静かに話を聞くことも、どれも当たり前のことですが、転校してきたばかりの私には、驚くことばかりでした。

以前の中学校では、先生をからかったり、授業を受けないで、ふざけたり…などなど悪さすることで生活を楽しんでいました。何よりも、物事に対する【良い・悪い】の判断が全くできていませんでした。部活も半分、遊びでやっていたようなものなので、勝ちたい!などの強い気持ちを持ったことは一度もありませんでした。そんな生活に楽しさを持っていたし、充実していると思っていました。なので、1年生で転校が決まった時は、正直不安でした。あまり前向きな気持ちではなかったです。

でも、この田野畑中学校に来て、私の考えが180度変わりました。確かに最初は、部活の朝練はあるし、授業態度は真面目だし、教科の課題は多いし……などなど、めんどくささ、だるいなあ〜と思ったことは数えきれないぐらい、いやいや山ほどありました。でも、自分の嫌なことから逃げず、一生懸命に取り組む田中生のみんなはとても輝いて見えたし、カッコいい☆、私もああなりたい!そんな気持ちが強くなっていきました。

そこから私の大革命が始まりました。まずは、何事も自分の限界を決めずに本気で取り組もうと思いました。

勉強は、まず授業を集中して聞くことを始めま

した。家庭学習の内容もどんどん上がったことで、成績が何倍も良くなりました。

以前は遊び半分で取り組んでいた部活でしたが、同級生が活躍し、チーム全員がただひたすらにテニスと向き合う姿に刺激を受けました。練習では、何キロも走ることは当たり前で、冬にはキツイ筋トレもたくさんしました。時には、思うようにプレーができず悩んだこともあったし、部活へ行くのが嫌だと思った時もありました。でも、3年生最後の地区中総体で、団体戦3位という結果を受け、今までやってきたことは無駄じゃなかったんだなと思いました。つらかった練習も今となっては楽しかったなと思います。辛かった思いも、達成感に変わりました。仲間の姿や部活の雰囲気からいつの間にか、

「勝ちたい!」

という感情が生まれ、全部出しきれて、最高の地区中総体だったと感じています。

私はもう一つ田野畑中学校に来てチャレンジしたことがあります。それは、今までやったことのなかった【演劇】です。声を掛けられた時は、

「ええ〜何で私がやらないといけないの?」と思っていましたが、本番では緊張しながらも演技しることができました。今までの自分の殻を破り、新たな自分へと変われた貴重な体験でした。また、

「自分って、こんなこともできたんだ」

と思うことがあり、自分自身の新たな才能にも気付きました。

私はこの田野畑中学校に来て、今までの自分と違う自分をたくさん見つけることができました。何事にも本気、全力で取り組み、新たな自分に出会うことができ、本当に良かったです。残りわずかな学校生活。さらに充実した日々を送りたいです。未来への可能性をもっともっと広げながら……

○ この主張をどんな人に届けたいですか?

学級の皆、担任の先生、先輩、後輩、そして、私の成長を見守ってくれている田野畑に届けたいです。この環境だからこそ、私は自分を変えたいと思うことができたし、勉強・部活動・演劇・陸上などを本気になって挑戦することができました。それは、「田野畑」が私を受け入れ、包んでくれていることで得た安心感があったからです。感謝と普段伝えられていない想いを書いたので、皆さんに届いてほしいです。



入賞

ともに生きていく

野田村立野田中学校 3年

大澤 陽 和（おおさわ ひより）

私は、糖尿病とともに生きています。「糖尿病」と聞くと、食べ過ぎや運動不足から起こる、生活習慣病のイメージがあると思います。私の場合は、「Ⅰ型糖尿病」といって、インスリンがうまく働かず、血液中の糖分量が増えてしまうという病気です。

発症したのは、3年前、小学6年生の夏のことでした。体重が急に減り、体調が悪くて受診したところ、自分の身に、思いもよらないことが起きたことを知りました。当時は、まるで夢を見ているようで、自分が言われている気がしませんでした。病院のベッドで点滴を受けながら、この疾患は現在の医療の状況では、完治しないと聞かされました。この病気を生涯抱えて生きていかなければならないなんて、将来が不安でたまらなくなりました。10万人に1人ともいわれる病気に、なぜ自分になってしまったのか、どうして私なのか、そればかりが頭の中を回っていました。だいぶ後になって知ったのですが、母も大きなショックを受け、私の知らないところで、沢山泣いたそうです。きっと、私を不安にさせないように、懸命に前を向いていたのだと思います。

この病気になってから、私の生活は一変しました。食事はその都度、量や栄養素を計算しなければなくなりました。病気に体調を左右され、頭痛やけいれんも頻繁に起こりました。中でも一番の変化は、やはり、1日8回、日によってはそれ以上、自分の体に自ら針を刺さなければならなくなったことです。私も注射は嫌いです。でも、嫌でもやらないと、この病気を治める方法はなく、毎日針を刺しました。

この病気になってから、私は多くの人に支えられ、今があります。主治医の先生、看護師さん、家族、友人。そして、大学病院の小児科に入院中に会った、病気の子供たち。私より小さな子も沢山いました。彼らは、懸命に病気と闘っていました。そして、一見すると病気だと分からないくらい、明るく振る舞い、日々を一生懸命生きていました。その姿が、不安でたまらなかった私の、心強い支えとなりました。私は彼らを決して忘れません。

私は、病気になったことで、普通の生活がどれほど幸せなことなのかを知りました。また、普通に見えても、不安を隠して、病気と闘っている人も大勢いるということも知りました。そして、そのことを皆さんにも理解してほしいと思いました。病気を公にすることは、とても悩みました。ようやく今は、針を刺すのも生活の一部であり、病気も私の一つの個性だと考えられるようになりましたが、この生活はこれからも続きます。神様は、その人が乗り越えられる試練しか与えないそうです。だから、私は、病気とともに生きていく人生を受け入れ、愛していきたいと思います。そう思えるようになったのは、私を理解し、支えてくれている皆さんのおかげです。病気や障害は見えるものだけではありません。だからこそ、お互いを思いやり、理解し合い、支え合いながら、誰もが今を自分らしく生きていける社会であってほしいと思います。そして、そうした社会が実現するように、私自身も、この命を大切にし、できることを探し、実践していこうと思います。

○ この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

国語の先生から声をかけていただいたことがきっかけで取り組みました。私は、病気になって気づいたことがたくさんあったので、そのことを周囲の人にも伝えたいと思いました。病気や障害を抱えて悩んでいる同世代の人や、Ⅰ型糖尿病を知らない人にも思いが伝わると嬉しいです。これからも、病気とともに生きる私、ありのままの自分を見てもらい、受け入れてもらえるように、様々なことに挑戦して自分を高めていきたいです。



入賞

夢を叶えるために

軽米町立軽米中学校 3年

菅 原 静（すがわら しず）

「消防士？ 静さん、それ本気ですか？」

これは、去年職場体験のレポートを書いていた時に言われた一言です。

私は将来、消防士になりたいと思っています。そのきっかけは、私が小学生の頃、祖父の体調が悪くなり、家に救急車が来たことです。祖父に、「何月何日か分かりますか。」「名前は分かりますか。」と冷静に聞いている姿がかっこいいと思いました。通報してすぐ駆けつけてくれて、病院まで責任持って運んでくれることが、幼い私にはすごいと思いました。

火災現場にすぐにつけ、たくさんの人の命を助けている場面をニュースなどで見て、私はとても憧れました。

だから、「本気？」と聞かれた時、「どうして？何が悪いの？」とレポートを書き終えるまで考え続けました。「今までそんなことを一言も言っていなかったから？」「吹奏楽部だから？」「体力がなさそうだから？」

私は考え続けた結果、自分なりの答えにたどり着きました。「女性だから男性のように活躍できない。」

では、女性は消防士になってはいけないうのでしょうか。

インターネットで調べてみると、現在全国に消防士は約 16 万人。そのうち約 5 千人が女性でした。東北ではまだ少ないですが、全国では 5 千人もの女性消防士が活躍していることに驚かされました。

今年の 6 月、社会科の授業で「SDGs」について学びました。「SDGs」とは、2030 年までに達成すべき、「持続可能な開発目標」です。「誰一人として取り残さない」ことを誓っています。17 の目標の 5 つ目に、「ジェンダー平等を実現しよう」

があります。私はこの理念に心ひかれました。

男女差別は世界中どこにも存在し、私たちの身近にも存在します。日本にはまだ、「男性は仕事、女性は家事・育児」という考えがあります。「ジェンダー平等」が実現されていないのが現状なのかもしれません。

私は改めて調べました。ある市のホームページに女性消防士が活躍している様子を取り上げる記事を見つけました。それを見て私は思いました。どうしても男女で力の差は出てしまうけれども、女性にしかできないことがあるはずだ、と。たとえば、災害現場から救助された人の心に寄り添うこと。優しく話しかけることで、不安や恐怖を少しでも和らげることができるはずです。

私たち一人ひとりには、それぞれにしかない特性・個性を持っています。「足が速い。」「計算が得意。」「笑顔が素敵。」いろいろあるはずです。そして、性別もその一つでしかありません。

だから、「女だからやってはいけない。」「男なのにやるのはおかしい。」という思い込みや偏見をなくすることが大切です。そうすれば私たちひとりひとりの行動に大きな可能性が広がると思います。自分の好きなこと、やってみたいことに誰もが挑戦できるはずです。一人ひとりが持っている能力を発揮できる社会、言い換えれば、それが「持続可能な」社会の実現になります。

私が一人前の消防士になるには、体力や精神的に辛いことを乗り越えなければなりません。私にとって、大きな「挑戦」です。

私は夢を叶えるため、挑戦し続けていきます。それが、私の「ジェンダー平等」の第一歩です。

○ この作品を通して、これからどんな人生を作り上げていきたいですか？

周りの意見に流されず、自分のやりたいこと、やってみたいことにどんどん挑戦していきたいです。最後まで諦めず努力していきたいです。たくさんの人の命を救う消防士になって、後悔しない人生を作り上げていきます。

審査委員長講評

(株)岩手日報社論説委員会委員長 郷右近 勤

それでは審査委員会の講評をさせていただきます。

今回の「わたしの主張」岩手県大会は、新型コロナウイルス感染拡大を受け、各地区代表が一堂に会しての開催を取りやめ、初めて映像による審査となりました。選ばれた生徒が大勢の前で弁論するという緊張感にはやや欠け、貴重な発表の場が別の形になったのは残念ですが、いずれも素晴らしい内容だったと思います。映像だと会場で聴くよりも発表者の表情がよく見えて、この日のために表現力を高める訓練を重ねてきたことがよく伝わりました。

全体的には、身近なことを題材にする発表が多かったと思います。家族の障害や自閉症、あるいは自らの病気や重度のアレルギー。そういった環境に置かれている人は、自分や家族が「人と違う」ことを痛いほど知っています。それに加えてLGBT（性的少数者）、性自認のことを正面から取り上げる方もおられました。

「人と違う」ことに悩み、苦しんでいる。でも、さまざまな出来事を通じて「違っていてもいいんだ」ということが分かってくる。違いと個性を受け入れていこう。それが偏見や差別をなくしていくことにつながる。そういった訴えが目立ちました。

まさにその通りであり、個性を大事にすることで、より良い地域社会ができていくのです。優秀賞の西根中・工藤ほのかさんが訴えたように「違いを誇りに」していただきたいと思います。同じく優秀賞の花巻北中・留場優那さんが、自らのつらさや孤独の経験から「苦しんでいる人を光で照らしてあげられる人になりたい」と語ったのも、聴き手の心を揺り動かしました。

中学生らしく、夢に向かっていく姿勢も見られました。人のために役立つ消防士になりたい、という発表が2人の方からあったことが象徴的です。最優秀賞に輝いた柳沢中・高橋美花さんも、看護師になる夢を語りました。その中で、看護師さんの講話を聴いたことから、相手と心を通わせるあいさつの大切さに気づき、相手との心の距離を縮めることを訴えました。人を思いやるコミュニケーションのために、自分が一歩踏み出す。聴き手を深く共感させる内容だったと思います。

高橋さん、おめでとうございます。全国大会の候補者として北海道・東北ブロック審査会に推薦されますが、主張の思いがより多くの方々に届くことを期待しています。

今大会は自分や家族など身の周りのテーマが目立ちましたが、身近に特別な経験がなくても、「わたしの主張」をすることはできます。主張することの第一歩はまず、問題を把握することです。それは学校や家庭ばかりでなく、社会や世界にも見いだすことができます。どこに問題があって、問題はどのよう広がって、どのように解決すればいいか。そういった主張をするためには、想像する力、共感する力が欠かせません。

例えば貧困の問題があります。日ごろ何不自由なく生活していると、地域や日本、世界にある貧しさには気付かず、鈍感になってしまいます。想像力があれば、自分なりに問題が見えて、自分なりの解決策を探ることができる。それを訴えるのが「主張する」ということです。

では、どのように想像力を培えばいいか。友人や家族との対話、テレビやインターネットなどから想像することもできますが、最も大切なのは本を読むことだと思います。読書で育つ想像力は自分だけのもので、今後の人生に大きく役立ちます。

「真の知識は活字を通してしか獲得できない」。作家の浅田次郎さんはそう断言しています。ぜひ活字に親しみ、想像力・共感力を養って、問題解決の力を付けていただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

各地区大会の開催結果

(注) 出場者欄 最＝最優秀賞 秀＝優秀賞 良＝優良賞

盛岡東地区	応募者数	778人
-------	------	------

日 時 令和3年8月31日（火）13：00～16：00

場 所 盛岡東警察署

審査委員

(株)岩手日報社報道部第二部長	斉藤陽一
盛岡教育事務所在学青少年指導員	太田厚子
盛岡市教育委員会教育研究所専門研究員	岩崎雅司
盛岡東警察署刑事官	高橋裕隆
盛岡東地区防犯協会連合会長	鎌田まき子

出場者

1 忘れてはいけない思い	北松園 3年 上澤幹太
2 未来へつなぐ	黒石野 3年 山田夏希
3 少し大人になってしまったかもしれない	松園 3年 吉田暁大
4 見るなのタブー	白百合 3年 鈴木桜
5 相手の気持ちに	下小路 3年 阿部花梨奈
6 人種の大きな壁を乗り越えて	米内 3年 竹森陽菜
良 7 処 ^{ばか} 二万変 ^ご 主 ^は 三 ^は 一 ^は 歌 ^は	仙北 2年 三浦萌
(万変に処するに一歌を主とす)	
8 平等な人間関係をつくるために	巻堀 3年 森智咲
秀 9 振り返れば、わたし	上田 3年 藤原麻央
良 10 0にできなくても	河南 3年 城内凜
最 11 ありのままの自分を受け入れて	下橋 3年 林美羽
12 「自律」より始めよ	岩大教育 学部附属 3年 畠山大輝
会長賞 13 世界は変わる	大宮 3年 佐藤綾音
14 言葉の力	渋民 3年 松坂柚良
15 レッツ スマイル	見前南 3年 藤村美咲
16 101回目もあなたは逃げて	玉山 3年 片島心咲
秀 17 タオル帽子のぬくもり	城東 3年 山田明希
良 18 目をそらさずに	乙部 3年 田山凜花

盛岡西地区	応募者数	561人
-------	------	------

日 時 令和3年8月31日（火）13：30～16：00

場 所 盛岡西警察署

審査委員

(株)岩手日報社編集局報道部専任部長	鹿糠敏和
盛岡市教育委員会教育研究所専門研究員	山口道明
滝沢市教育委員会学校教育専門員	名須川淳精
雫石町教育委員会社会教育指導員	下川恵司
盛岡西警察署長	金田一正人
盛岡西地区少年警察ボランティア協会会長	切金一夫
盛岡西地区防犯協会連合会長	佐藤栄一

出場者

1 MJT宣言	姥屋敷 3年 石川友翔
2 多様性を受容する社会	中央附属 2年 佐藤優花

良 3 一本のネイルから	厨川 3年 千田瑞稀
4 私の生き方	土淵 3年 門口遥香
5 ペットの幸せと人の幸せ	滝沢第二 3年 片山航輔
最 6 挨拶	柳沢 3年 高橋美花
良 7 信じる勇気、断ち切る勇気	城西 3年 名生佑生
良 8 自分らしく生きていくために	一本木 3年 佐々木雪乃
9 「持続可能な社会」のために	雫石 3年 晴山雄太
秀 10 あたりまえであるように…	滝沢 3年 田川原優衣
秀 11 寄り添う心	北稜 3年 宅石一葉
12 笑ってつながろう	滝沢南 3年 推野煌生

北岩手地区	応募者数	147人
-------	------	------

日 時 令和3年8月31日（火）14：00～16：00

場 所 岩手町役場庁舎3階 議会委員会室

審査委員

岩手町教育委員会教育長	佐藤卓
葛巻町教育委員会教育長	高畑嗣人
八幡平市教育委員会教育長	星俊也
岩手警察署長	藤林隆博
岩手警察署生活安全課長	川原郁子
北岩手地区少年警察ボランティア協会会長	松村昭一
(株)岩手日報社岩手支局長	菅川将史

出場者

良 1 今だから大切なこと	葛巻 3年 緑川葵巳
良 2 幸せな今のために	江刈 3年 丸山晃奈
3 同じラインに立ちたくて	小屋瀬 3年 金沢結菜
最 4 SHINE	西根 3年 工藤ほのか
5 「支えを強さに」	西根第一 3年 高橋悠愛
秀 6 「ぼくだからこそ」	松尾 3年 鈴木堅斗
秀 7 明日へのエール	安代 3年 松葉友吾
良 8 日常を楽しむ方法	沼宮内 3年 澤瀬真奈美
9 相手を思いやって言葉を	川口 3年 佐藤啓
10 「貧困問題について私たちができること」	一方井 3年 三浦麗愛

紫波地区	応募者数	102人
------	------	------

日 時 令和3年9月2日（木）13：20～14：50

場 所 矢巾町役場大会議室

審査委員

盛岡教育事務所在学青少年指導員	畠山雅之
矢巾町教育委員会教育研究所長	小山田孝
紫波町教育委員会教育相談員	菅野秀一
紫波警察署長	渡辺利美
(株)岩手日報社報道部長	熊谷宏彰

出場者

- 良 1 地球からのSOS 紫波第一 3年 浅沼 愛 和
秀 2 「正しい考えで未来を私たちの手に」 紫波第二 3年 大志田陽羽
3 情報化社会を生きる 紫波第一 3年 岩 穴 翔 汰
良 4 本当の優しさとは 紫波第三 3年 浦 田 優 香
最 5 「知ること」から始めよう 矢巾北 3年 川 向 杏 奈

花巻地区 応募者数 374人

日 時 令和3年8月31日（火）14：00～16：00

場 所 県立生涯学習推進センター

審査委員

- 中部教育事務所在学青少年指導員 山 蔭 知 也
花巻市校長会笹間第一小学校長 高 橋 昌 克
花巻警察署長 足 利 郁 男
花巻市青少年育成市民会議会長 鎌 田 幸 也
花巻市教育委員会スクールソーシャルワーカー 高 橋 啓 悦
（株）岩手日報社花巻支局長 山 本 直 樹

出場者

- 1 ‘ベ・イト・フワート’でつながる未来 宮野目 3年 橋 本 蓮 希
2 看護師さんのおにぎり 矢 沢 3年 古 川 杏 実
3 明るい未来へ 東 和 3年 菊池穂乃華
良 4 今だからできること 湯 本 3年 藤 原 芽 衣
良 5 日々、挑戦！ 西 南 3年 鎌 田 陽 菜
良 6 誰かの心 石鳥谷 3年 金 子 理 咲
秀 7 とともに生きる 湯 口 3年 高 橋 陽 菜
秀 8 一人の仲間として 花 巻 3年 奥 山 桜 帆
9 スマホとともに生きていくこと 南 城 3年 君崎優衣花
最 10 光 花巻北 3年 留 場 優 那
11 薄れゆくものに思いを寄せて 大 迫 3年 菊 池 姫 梨

北上地区 応募者数 251人

日 時 令和3年9月1日（水）14：00～16：30

場 所 北上警察署

審査委員

- 中部教育事務所在学青少年指導員 多 田 克 巳
（株）岩手日報社北上支局長 稲 垣 大 助
北上警察署長 千 田 敬 喜
和賀地区校長会二子小学校長 齋 藤 佳 孝
西和賀町教育委員会教育長職務代理 深 澤 武 志

出場者

- 秀 1 社会を支える「底辺職」 南 3年 鈴 木 凜
2 一人一人が輝くために 上 野 3年 浅沼 由 夢
3 「エラーとサヨナラ負け」を糧にして 沢 内 3年 三 浦 奏 胡
良 4 認め合える世界に 江 釣 子 3年 後 藤 渚 菜
5 感謝を伝える人として 湯 田 3年 佐 藤 暁 人
良 6 向き合う力 北 上 3年 関 向 紀 杏

- 7 母の思いを胸に 東 陵 3年 助 川 葵
8 私のなりたい姿 和賀西 3年 藤 原 汐 菜
最 9 笑顔に力を 北上北 3年 小田島芽吹
10 御恩報謝 和賀東 3年 高 橋 芽
11 安心安全は「意識する」ことから 飯 豊 3年 野 中 夏 希

奥州地区 応募者数 568人

日 時 令和3年9月1日（水）13：15～15：10

場 所 奥州市役所302会議室

審査委員

- （株）胆江日日新聞社編集局長 小野寺和人
（株）岩手日報社奥州支局長 佐 藤 俊 男
県南教育事務所在学青少年指導員 佐 藤 健 司
奥州地区少年警察ボランティア協会会長 今 野 誠
奥州警察署生活安全課長 青 木 優 亮

出場者

- 1 好きなことに全力で 東水沢 3年 小野寺杏菜
2 見かけだけで判断しないで 胆 沢 3年 小 倉 優 太
良 3 大切な私 衣 川 3年 堀 江 菜 生
秀 4 世界を変えるために 江刺南 3年 中 嶋 七 海
5 きらめく思いの宝物 水 沢 3年 大 内 侑 那
良 6 共生できる社会を目指して 江刺東 3年 菅 野 華 子
良 7 「自分らしく生きる」 前 沢 3年 菊地理野愛
8 命を守る判断の基準 水沢南 3年 伊藤よつは
最 9 希望のある社会へ 東水沢 3年 藤 代 菜 央
10 言葉が生み出すものは、
悩みではなく笑顔がいい 江刺第一 3年 引 地 佳 歩
11 今だからこそ感じる思い 金ケ崎 3年 工 藤 彩 世

関地区 応募者数 250人

日 時 令和3年8月24日（火）13：50～15：30

場 所 一関文化センター中ホール

審査委員

- 一関市教育委員会教育研究所教育相談員 浅 沼 卓
一関警察署長 上 野 太 郎
県南教育事務所在学青少年指導員 加 藤 清
（株）岩手日報社一関支社長 千 葉 恵
平泉町教育委員会教育委員 三 浦 英 子

出場者

- 良 1 「批判」と「中傷」の違い 磐 井 3年 阿部あずさ
2 言葉のチカラ 一関東 3年 菅 野 颯 良
良 3 「夢」の力 一 関 3年 松 岡 そ よ
4 亡き祖母へ 萩 荘 3年 石 川 愛 遥
5 「みんな同じ」 厳 美 3年 遠藤唯桜花
6 さりげない支えは 平 泉 3年 小野寺愛莉
7 後悔の先に 舞 川 3年 小野寺莉那
最 8 思いやりの力 桜 町 3年 岩 本 智 陽

9 アニメがくれた夢 花 泉 3年 武田 朱 琉
秀 10 未来を生きるために 一関一高 3年 平 沢 榎 澄
附 属

一関東地区 応募者数 91人

日 時 令和3年8月26日（木）13：30～15：30

場 所 大原市民センター

審査委員

県南教育事務所在学青少年指導員 加 藤 清
千厩警察署長 古 里 正 博
一関市教育委員会教育研究所教育相談員 門 間 健 一
（株）岩手日報社一関支社長 千 葉 恵
（株）岩手日日新聞社編集局次長 伊 藤 正 幸

出場者

良 1 当たり前で一番大切なこと 川 崎 3年 滝 澤 芽 依
2 違いの先にあるもの 大 原 3年 奥 出 絢
3 可能性を広げる 千 厩 3年 小 菅 凜 子
4 私のエール 東 山 3年 佐 藤 愛 莉
5 自分に自信がない人へ 室 根 3年 小 山 美 桜
秀 6 「一人じゃない」 興 田 3年 菊 池 優 那
最 7 本当の豊かさ 藤 沢 3年 近 江 美 咲
8 この世界の「一隅を照らす」ために 大 東 3年 岩 淵 真 央

気仙地区 応募者数 176人

日 時 令和3年8月27日（金）13：30～15：00

場 所 大船渡警察署

審査委員

沿岸南部教育事務所在学青少年指導員 菅 野 稔
気仙地区防犯協会連合会副会長 近 藤 均
大船渡警察署長 高 橋 幸 伸
（株）東海新報社社長 鈴 木 英 里
（株）岩手日報社大船渡支局長 村 上 俊 介

出場者

1 抗えない空気の中で 高田東 3年 岡 渕 侑 希
良 2 変化はチャンス、新しい未来へ 東 朋 3年 新 沼 美 里
3 本当のバリアフリーとは 世田米 3年 小野田朝日
4 私を変えてくれたもの 高田第一 3年 奥 田 巳 紘
5 前へ進むために 有 住 3年 佐々木理紗
最 6 支え合って、認め合って 第 一 3年 金 野 紗 弓
良 7 人と人が 大船渡 3年 大 畠 知 弥
秀 8 「ありがとう」はすぐそばに 末 崎 3年 小 川 祈 叶

遠野地区 応募者数 148人

日 時 令和3年8月30日（月）13：30～15：15

場 所 遠野市民センター大ホール

審査委員

中部教育事務所在学青少年指導員 山 蔭 知 也
最 6 ひとりでも多くの命を 川 井 3年 松 草 奏 重

遠野市教育委員会事務局学校教育課長 佐々木淳一

遠野市校長会青笹小学校長 佐々木美紀

遠野市少年委員協議会副会長 菊 池 タ キ

（株）岩手日報社遠野支局長 小野寺隼矢

遠野警察署長 足 利 信 弘

出場者

良 1 命を輝かせて 遠野東 2年 菊 池 琉 依
良 2 言葉の重み 遠野西 2年 多 田 憂 志
良 3 命の重さ 遠 野 1年 菅 田 菜 桜
秀 4 生きる言葉、生かす言葉 遠野東 3年 荒 川 颯 音
秀 5 優しさの輪をつなげていくために 遠 野 3年 菊 池 光 紗
最 6 救える命は必ずあるから 遠野西 3年 藤 原 真 結
良 7 語り継ぐ目的 遠 野 2年 佐 藤 有 優
良 8 生き抜く 遠野東 3年 小水内ゆりあ

釜石地区 応募者数 46人

日 時 令和3年8月24日（火）13：30～14：30

場 所 釜石市民ホールTETTO

審査委員

大槌町教育委員会教育長 沼 田 義 孝
釜石市教育委員会教育長 高 橋 勝
釜石警察署長 前 川 剛
（株）岩手日報社釜石支局長 川 端 章 子

出場者

1 みんなが平等になる未来を目指して 釜 石 3年 樋 岡 朱 音
2 まずは自分から 甲 子 3年 菊 池 音 乃
3 希望の風を揚げよう 唐 丹 3年 一 関 航 帆
秀 4 虎舞を踊る理由 吉里吉里 9年 芳 賀 光 希
最 5 弱いからこそ 学 園 大 平 3年 菅 原 小 雪
良 6 私の未来へ 釜石東 3年 藤 原 美 唯 那

宮古地区 応募者数 80人

日 時 令和3年8月31日（火）13：30～15：55

場 所 宮古警察署4階会議室

審査委員

（株）岩手日報社宮古支局長 刈 谷 洋 文
宮古教育事務所在学青少年指導員 佐 藤 和 信
宮古市教育委員会教育研究所長 青 笹 光 一
山田町教育委員会教育長 佐々木茂人
宮古警察署長 高 橋 淳

出場者

1 学びの道は険しくも務め励みて共に 山 田 3年 吉 川 大 輝
2 命を預かる責任 重 茂 3年 高屋敷史句
3 コンプレックスと向き合う 第 一 3年 小笠原あかり
秀 4 「違い」を認める先に 津軽石 3年 山本陽南子
5 僕の夢 崎 山 3年 北 村 岳 土
8 「友達と遊ぶ」とは 長 内 3年 欠 畑 永 愛

良 7 これまでの十年、これからの十年 河 南 3年 佐々木 杏夏
 8 無自覚のいじめをなくすには 新 里 3年 因 幡 聡 美
 9 語り伝えることの大切さ 田老第一 2年 晴 山 愛 葵
 良 10 みんなで「いただきます」を言える世界に 宮古西 3年 大久保 ゆり
 秀 11 幸せを支える 花 輪 3年 佐々木 唯寧
 良 12 自分の住む町について知ろうとすること 第 二 3年 工 藤 帆 夏

下閉伊北地区 応募者数 37人

日 時 令和3年8月30日（月）13：00～15：00

場 所 岩泉町民会館大会議室

審査委員

県立岩泉高等学校長 吉 川 彰 彦
 (株)岩手日報社宮古支局長 刈 谷 洋 文
 岩泉町教育委員会教育長 三 上 潤
 田野畑村教育委員会教育長 相 模 貞 一
 岩泉警察署長 吉 田 孝 夫

出場者

良 1 大好きなふるさとで 金津田 3年 三 上 健 洋
 2 暇潰し 小 本 3年 阿 部 悠 汰
 3 未来につなぐ舞 小 本 3年 小 成 美 優
 4 今の私だからこそ 岩 泉 3年 北 村 友 香
 5 人との交流が生むもの 岩 泉 2年 中川原 颯春
 6 命のパートナー 小 川 3年 工 藤 可 乃
 秀 7 病の特効薬 小 川 2年 竹 花 広 大
 8 釋に想いを乗せ 田野畑 2年 小松山 優心
 最 9 道の選択 田野畑 3年 熊 谷 珠 奈

久慈地区 応募者数 13人

日 時 令和3年9月2日（木）13：30～16：00

場 所 久慈市役所3階車庫棟会議室

審査委員

野田村教育委員会教育長 小 原 正 弘
 久慈警察署長 加 藤 秀 昭
 久慈地区中学校文化連盟 大 西 香 織
 (株)岩手日報社久慈支局長 木 村 亮
 久慈地区少年警察ボランティア協会会長 濱久保 優司
 県北教育事務所在学青少年指導員 新 毛 公 生

出場者

1 弱さと向き合って 夏 井 3年 粒 未 燿 空
 秀 2 笑顔あふれる未来へ 普 代 3年 片 座 早 彩
 3 私が望む平和 大 野 3年 征 木 晏 奈
 最 4 とともに生きていく 野 田 3年 大 澤 陽 和
 5 自由な世界の実現 種 市 3年 八 木 沢 実
 良 6 より広くより深く強めること 宇 部 3年 中 野 結 太
 7 関わりの中で生きる 久 慈 3年 山 崎 照 美

9 私たちにできる介護とは 三 崎 2年 大 道 慶 三
 良 10 わたしは変わりたい 大川目 2年 卯 城 琴 音
 11 明日が来るのは当たり前じゃない 山 形 3年 宅 石 希
 良 12 悩みを救える人に 中 野 3年 日 向 美 桜
 秀 13 「あたりまえ」は奇跡の連鎖 侍 浜 3年 駒 澤 遥 香

二戸地区 応募者数 8人

日 時 令和3年9月8日（水）13：30～15：00

場 所 二戸地区合同庁舎1階大会議室

審査委員

県北教育事務所在学青少年指導員 新 毛 公 生
 二戸市教育委員会生涯学習課長 三 上 敬 子
 二戸地区中学校文化連盟会長 工 藤 久 尚
 二戸警察署長 南 部 一 成
 二戸地区少年警察ボランティア協会会長 田 畑 文 弥
 (株)岩手日報社二戸支局長 阿部友衣子

出場者

1 家族—family— 福 岡 2年 千 歳 ジェイムズ
 良 2 続けた先にあるもの 福 岡 3年 上 平 千 滉
 3 音楽はコミュニケーション 金 田 一 2年 中 野 陽
 秀 4 Our courage for our change 浄法寺 3年 鈴 木 智 千
 5 縄文人からのメッセージ 一 戸 3年 五 日 市 結 愛
 良 6 事故の根絶を目指して 奥中山 3年 倉 口 歩 羽
 最 7 夢を叶えるために 軽 米 3年 菅 原 静
 8 変化のチャンス 九 戸 3年 細 川 慶 仁

令和3年度（第23回）「わたしの主張岩手県大会」 審査要領

1 審査基準

(1) 採点の基準

各審査委員の持ち点は、発表者1人につき、次の区分による100点とし、採点は減点法とする。

ア 論 旨	55 点	} 計 100 点
イ 表 現	30 点	
ウ 態 度	15 点	

エ 時 間 主張時間は5分とする。

※ 主張時間が4分30秒未満の場合、又は5分30秒を超える場合は、それぞれの時間から10秒を過不足するごとに1点を減点する。

※ 発表時間は、読み始め（パフォーマンス含む）から読み終わり（パフォーマンス含む）までとする。

(2) 採点の内容

ア 論 旨：① 若者（中学生）らしい感性で、新鮮な主張であるか。

② 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。

③ 自己の目標を实践する意欲や、提言に関する熱意・真剣さが感じられるか。

④ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

イ 表 現：① 熱意と説得力があり、聴衆に感銘を与えたか。

② 言葉や発声は明瞭で、抑揚・間の取り方も適切であったか。

ウ 態 度：（聴衆をよく見て）落ち着いた態度であったか。

エ 時 間：・主張開始後5分 …………… ベルを1回

・主張開始後5分30秒 …………… ベルを2回

2 審査方法

(1) 審査表の記入

各審査委員は、各発表者の審査結果を、審査採点票（個票）及び審査採点票（控）に記入する。

(2) 順位の決定

各発表者の主張終了後、審査会において最優秀賞1人、優秀賞2人、優良賞3人を選考する。

受賞者の決定は、採点集計表を参考とし、審査委員の協議によるものとする。

なお、最優秀賞受賞者は、「少年の主張全国大会」候補者として、北海道・東北ブロック審査会に推薦するものとする。

3 成績発表並びに講評

審査委員長が結果を発表し、講評を行う。

※各地区大会の審査要領は、岩手県大会審査要領に準じるものとする。

令和3年度（第23回）「わたしの主張岩手県大会」実施要綱

1 目 的

次代を担う中学生が、未来に向けての夢、社会に対しての意見や希望、または日常生活の中で感じたこと（意見・発見・提案・疑問）など、自分の気持ちを素直に表現する弁論の場を提供することにより、地域社会との関わり（つながり）について考え、行動する契機にするとともに、参加中学生の文化的な資質向上に寄与し、大人を含めた多くの人が、中学生に対する認識、理解を深めることにより、少年の健全育成の充実を期そうとするもの。

2 対 象

県下に在住している中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にある方

3 主 催

わたしの主張岩手県大会実行委員会

【 岩手県 岩手県教育委員会 岩手県警察本部 （公社）岩手県青少年育成県民会議
（公社）岩手県防犯協会連合会 （株）岩手日報社 岩手県中学校文化連盟 】

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

4 共 催

盛岡市 盛岡市教育委員会

5 後 援

岩手県中学校長会 岩手県PTA連合会 NHK盛岡放送局 IBC岩手放送 テレビ岩手
エフエム岩手 めんこいテレビ 岩手朝日テレビ

6 開催日時

令和3年9月15日（水） 12時45分～16時15分 → 13時15分～16時10分に時間変更

7 開催場所

盛岡劇場（河南公民館）〒020-0873 盛岡市松尾町3-1 → 岩手県庁8階 8-L会議室に会場変更
※作文・映像での審査会に変更

8 開催方法

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、一般の観客は入場しない無聴衆での開催とします。今後の状況次第では、会場へ参集せず、作文・映像での審査会とする場合もあります。（「別記」参照）

9 出場者

別に定める推薦要領に基づき、地区大会より推薦された17名による主張発表を行います。

10 発表内容

(1) 主張の内容

下記の内容を参考として、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを率直に表現してください。未発表・自作のものに限ります。

分類	内 容	これまでの例(参考)
A	- 社会や世界に向けての意見 - 未来への希望や提案など	- 環境問題、国際社会について - 地域の伝統文化・伝統芸能 - 貧しい国への支援 - 介護の問題 - 夢に向かって 等
B	- 家庭、学校生活、社会（地域社会）との関わり - 身の回りや友達との関わりなど	- 命の尊さ - 共に生きる(障がいと向き合う) - 家族愛 - 人との関わり - 復興への思い 等
C	- 安全で安心な生活ができる地域社会づくり - テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動 - 大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など	- 犯罪のない明るい地域社会づくり - 交通事故を防止するには - いじめのない社会生活 - 公共のマナーや規則を守ること - インターネットやスマートフォンの危険、正しい利用方法 - 報道されている事件や事故の防止 等

※ 複数の分類に関わることも十分想定されます。重複可能です。

※ 商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。

（悪い例：〇〇県にある〇〇旅館 良い例：〇〇県にある旅館 など。）

(2) 発表方法

自由（日本語で発表することが条件）

※ 発表の際はマイクを使用します。

※ 発表に際しては、パフォーマンス（例えば、服装は自由とし、小道具を使用してもよい）を取り入れてもよいこととします。ただし、発表者以外の動作・補助等は認めません。

※ 発表者の礼は、発表前後の2回とします。（礼は審査対象とはなりません）

(3) 発表時間

5分間（400字詰め原稿用紙4枚程度）

※ 発表時間は、読み始め（パフォーマンス含む）から読み終わり（パフォーマンス含む）までとします。

※ 発表時間が4分30秒未満の場合、又は5分30秒を超える場合は、採点の際に1点減点となりますので、ご注意ください。（さらに10秒ずつ過不足するごとに1点ずつ減点）

【発表時間による減点】

時間	4' 10～4' 19	4' 20～4' 29	4' 30～5' 30	5' 31～5' 40	5' 41～5' 50
減点	2	1	0	1	2

11 表彰

発表終了後、直ちに開催する審査会において、最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞3名を選考し、表彰します。

なお、最優秀賞受賞者は、北海道・東北ブロック審査会に「少年の主張全国大会」の候補者として推薦します。

12 自然災害等への対応

(1) 自然災害等による大会中止

大会中止の判断基準は、以下のとおりとします。

① 自然災害等により、欠席者が3分の1を超える見込みの場合（7名以上が参加できない場合）

② 会場及び会場周辺の被災等により、当日の大会開催が困難な場合

(2) 大会中止時の対応について

① 当日8:30分前に中止と判断した場合は、直ちに参加者等へ連絡します。

※ 当日8:30以降は、原則として参加可能者のみで大会を実施し、最優秀賞受賞者を東北・北海道ブロック大会へ推薦します。

※ 当日8:30以降であっても、12(1)②と判断される場合には、大会を中止し、直ちに参加者等へ連絡します。

② 大会中止の場合も、12(1)②の場合を除き、会場に集合可能な審査員に集合していただき、作文・映像審査により最優秀賞を決定します。

(3) 新型コロナウイルス感染拡大に伴うリスクへの対応

感染拡大や学校行事等の状況を考慮しながら、開催の有無や開催の方法等について実行委員会で随時協議し、各地区実行委員会に連絡することとします。（「別記」参照）

13 その他

(1) 提出された原稿・映像データは返却しません。また、岩手県大会に参加した作品の著作権・放映権は、大会主催者に帰属します。映像データにつきましては、個人情報が含まれるため大会終了後に大会主催者が消去又は廃棄いたします。

(2) 岩手県大会出場者及び引率者（1名）の旅費は主催者が負担します。県大会出場者には、出場決定後改めて案内を送付します。

14 問合せ先

【主に実施要綱や地区大会の結果取りまとめ等に関する事】

わたしの主張岩手県大会実行委員会事務局		
〒020-8570	盛岡市内丸10-1	TEL 019-629-5336
	岩手県環境生活部若者女性協働推進室内	FAX 019-629-5354

【主に県大会出場者や県大会の運営に関する事】

公益社団法人 岩手県青少年育成県民会議		
〒020-0045	盛岡市盛岡駅西通1丁目7-1 アイーナ6階	TEL 019-681-9077
		FAX 019-681-9078

【主に地区大会の運営・予算に関する事】

公益社団法人 岩手県防犯協会連合会		
〒020-0881	盛岡市天神町11-1	TEL 019-653-4448
	岩手県交通安全会館	FAX 019-653-4488

わたしの主張岩手県大会の期日・会場及び最優秀賞受賞者

回	年度	開催 期 日	会 場	最 優 秀 賞 受 賞 者				
				学 校 名	学年	氏 名	発 表 題	備 考
1	11	11.9.24	盛岡市立 飯岡中学校	一関市立 厳美中学校	3 年	佐藤 遥	苦悩の日々を乗り越えて	
2	12	12.9.21	矢巾町 「田園ホール」	花巻市立 南城中学校	2 年	小野寺 静	日本と中国のかけ橋に	
3	13	13.9.19	玉山村 「姫神ホール」	釜石市立 甲子中学校	3 年	八幡 茜	海外語学学習で学んだ心	全国大会出場、 「青少年育成国民会議会長奨励賞」受賞
4	14	14.9.19	雫石町 「野菊ホール」	久慈市立 久慈中学校	3 年	高安 愛美	風に吹かれて	全国大会出場、 「青少年育成国民会議会長奨励賞」受賞
5	15	15.9.19	岩手県立大学講堂	東山町立 東山中学校	3 年	高橋 志帆	老いも誇り	
6	16	16.9.27	花巻市文化会館	北上市立 南中学校	3 年	菅原 周平	嘶の言葉と言葉の話	全国大会出場、 「文部科学大臣奨励賞」受賞
7	17	17.10.4	盛岡市 「都南文化会館」	盛岡市立 上田中学校	3 年	坂本 潤奈	私は地球人	全国大会出場、 「文部科学大臣奨励賞」受賞
8	18	18.9.20	盛岡市 「アイーナホール」	遠野市立 上郷中学校	2 年	奥寺 大輔	とらわれない心で	
9	19	19.9.26	滝沢村 「チャグチャグホール」	普代村立 普代中学校	3 年	内野沢さつき	おじいちゃんからの伝言	
10	20	20.9.24	紫波町立 紫波第二中学校	八幡平市立 松尾中学校	3 年	藤原 寛	「吃音」の壁を越えて	全国大会出場、 「青少年育成国民会議会長奨励賞」受賞
11	21	21.9.24	盛岡市 「盛岡劇場」	盛岡市立 上田中学校	3 年	西郷 華菜	伝えていく責任	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
12	22	22.9.24	花巻市立 石鳥谷中学校	盛岡市立 見前中学校	3 年	因幡百合絵	どうせ枯れる花ならば	
13	23	23.9.22	滝沢村立 滝沢南中学校	陸前高田市立 気仙中学校	3 年	小笠原和恵	高らかに 響け	全国大会出場、 「審査委員会委員長賞」受賞
14	24	24.9.20	盛岡市 「盛岡劇場」	遠野市立 小友中学校	2 年	菊池愛利子	「命」をいただく仕事	
15	25	25.9.19	矢巾町 「田園ホール」	山田町立 山田中学校	3 年	中村 奈緒	「当たり前」の中に生きる	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
16	26	26.9.18	雫石町 「野菊ホール」	岩手大学教育学部 附属中学校	3 年	渡邊 美卯	一言の重さ	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
17	27	27.9.11	盛岡市 「キャラホール・都南公民館」	西和賀町立 沢内中学校	3 年	佐々木瑠海	支えられている命だから	
18	28	28.9.15	盛岡市 「小田島組☆ほ～る」	北上市立 南中学校	3 年	石川 杏奈	強く 優しく 未来を見つめて	
19	29	29.9.14	滝沢市 「ビッグルーフ滝沢」	奥州市立 東水沢中学校	3 年	小野寺悠来	得意なことを数えよう	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
20	30	30.9.14	矢巾町 「田園ホール」	岩手県立一関第一高等学校 附属中学校	3 年	小野寺千里	挑戦し続ける勇気	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
21	R1	R1.9.18	盛岡市 「小田島組☆ほ～る」	宮古市立 第一中学校	3 年	小笠原 凜	自由にはばたける社会へ	
22	R2	R2.9.16	滝沢市 「ビッグルーフ滝沢」	盛岡市立 下橋中学校	3 年	鈴木 凜	生き続ける	

(参考)

「第 43 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2021～」 入賞作品

【内閣総理大臣賞】

岐阜県代表

細川 士禾（ほそかわ とわ）さん 養老町立高田中学校 3 年

発表テーマ：認め合うことの大切さ

【文部科学大臣賞】

山梨県代表

平澤 朋佳（ひらさわ ほのか）さん 北杜市立甲陵中学校 3 年

発表テーマ：「心のマスク」をはずして

【国立青少年教育振興機構理事長賞】

群馬県代表

富田 樹香（とみた じゅか）さん 太田市立南中学校 3 年

発表テーマ：本物の輝き

【審査委員会委員長賞】

熊本県代表 葛谷 護さん 宇城市立松橋中学校 3 年

発表テーマ：教室

沖縄県代表 砂川 恵里香さん 宮古島市立久松中学校 1 年

発表テーマ：私の挑戦

- 1 「第 43 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2021～」(WEB 開催)について
 - (1) 主 催：独立行政法人国立青少年教育振興機構（後援 内閣府、文部科学省ほか）
 - (2) 開催期間：令和 3 年 11 月 1 日（月）～11 月 30 日（火）
※審査結果は 11 月 14 日（日）に掲載されました。
 - (3) 開催場所：少年の主張全国大会 WEB ページ
（方法） 全国大会出場者（12 名）の主張発表動画を掲載
11 月 14 日（日）に審査委員会で審査した結果を掲載
※全国大会に選出されなかった作品については作文が掲載されました。
 - (4) 参 加 者：各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 名
の中からブロック代表として選ばれた 12 名
※ 岩手県大会最優秀賞受賞者の滝沢市立柳沢中学校 3 年 高橋美花さんが努力賞を受賞しました。
- 2 入賞作品を印刷物等に転載する場合は、国立青少年教育振興機構（教育事業部事業課事業係 TEL03-6407-7683）から許可を受けてください。

認め合うことの大切さ

岐阜県 養老町立高田中学校 3年 細川 士禾

みなさん、もしあなたが、片腕のない人を見かけたら、どうしますか。声をかけますか。それとも、かけませんか。もし、あなたがお子さんと一緒にいるときならどうですか。「見ちゃだめだよ。」そんな声をかけますか。

僕の妹には、生まれつき片腕がありません。そのことで、妹はたくさんの辛い思いをしてきました。—「あの子、手がないよ。」

今年の春、妹がある女の子から言われた一言です。妹は、どうしていいか分からないと、戸惑いと悲しみの表情を浮かべ、僕たち家族の前でわんわんと泣いていました。その姿は今でも僕の目に焼き付いています。それを見た母も、本当に苦しそうでした。まるで何もしてあげられない自分を責めるかのように、ただ泣いていました。そのときのことを思うと、胸がぎゅっと締め付けられます。ただ、みなさんに知ってほしいことは、妹は、このような経験を何度もしてきたということです。

そうした中、僕は自然と考えるようになっていました。もし、自分が、逆の立場だったらどうするのだろうか。妹と同じように、片腕がない人がいたら、足がない人がいたら…、僕はどうするのだろうか。

きっと、「見てしまう」と思います。なぜでしょうか。答えは簡単です。「自分と違うから」です。時に、「違う」ことは、問題を引き起こす原因にもなり得ます。しかし、「違う」と認識すること、これは、差別なのでしょうか。そもそも今年の春、妹の手がないと言った女の子。彼女に、相手を苦しめようとする意志はあったのでしょうか。きっと答えは、「NO」です。

僕は思います！僕たちはいつからか、「差別をしないこと」＝「何もしないこと」、ひいては、「目を背けること」だと、大きな勘違いをしているのではないかと。冒頭で話した、「見ちゃダメだよ」という発言も、このような勘違いから生まれた言葉じゃないでしょうか。

違いを認識し、見て見ぬふりをすること、そして、何もしようとしないこと、これこそが、大き

な問題だと、僕は思うのです。なぜなら、僕たち人間は、違いを知るからこそ、その先のことを考えることができるはずだからです。

それから僕は、妹にかける言葉が変わりました。

「見られるのは当たり前だよ。だってさ、自分と違うんだから。」聞いた妹は、少しきょとんとして、僕の顔を見つめていました。

僕も妹も母も、辛い経験を多くしてきましたが、考え方一つで、こんなに大きく傷付くことはなかったのかもしれませんが。相手は違いを認識しただけ。その先が何よりも大事です。僕たちも、もしかしたら、スタートラインに立っていなかったのかもしれませんが。

妹のおかげで、僕は大切なことに気付けたような気がします。差別とは、考えることをやめ、相手から目を背けることなのです。ですから、「見ちゃだめだよ。」に代表されるような言葉は、一見相手を思いやっているようにも見えますが、考える機会をただ奪うことにもつながりかねない、上辺だけの言葉なのです。ですから、僕たちは、まず、その人らしさを認め、違いを受け入れ、その上で、その人にとってどんな行動や考え方が必要なのかを考え、見つけ出していくことが、何よりも大切なのです。

妹がいてくれたからこそ、僕は目を背けず、考えることができました。

妹がいてくれたからこそ、僕は相手の気持ちを考え、行動することができました。

今の僕があるのは、まぎれもなく妹のおかげです。本当にありがとう。僕は、これからも、妹が、そして、全ての人が、心から笑っていられるように、目を背けず考え続けます。その先に、差別のない社会があると信じて。

「心のマスク」をはずして

山梨県 北杜市立甲陵中学校 3年 平澤 朋佳

みなさん、マスクをつける日常へと変化したことで、今まで普通に行えていたコミュニケーションが上手くいかず、誤解が生まれてしまったという経験はありませんか。このような、情報を伝えた人の意図と受け取った人の意図が異なってしまうことを「ミスコミュニケーション」というそうです。

私の友人は、仲間からの相談を受けていた時、相手から「今笑ったでしょう」と言われてしまいました。しかし友人は笑うつもりなんてもちろんありませんでした。なぜそのような誤解が生まれてしまったのでしょうか。その原因はマスクでした。お互いにマスクをしての会話だったので、表情を間違っていると知られてしまい、誤解へと発展してしまっただけです。まさにこれはマスクによる「ミスコミュニケーション」です。

今、社会ではマスクをつけることがモラルとして定着しています。感染拡大を防ぐ面ではこれほど重要なことです。ですが私にはこのマスクが、まるで目に見える他人との境界線や壁のように感じてしまいます。

私も似たような経験をしました。小学校の頃の友人と偶然再会したときの出来事です。私は彼女との話が面白くて、笑いながら会話をしていたにも関わらず、彼女から冗談めいた口調で「顔が笑っていないよ。」と言われました。

「そんなことないよ。話、面白いじゃん。」

私は驚いてそう返しました。私は心から面白いと思って笑っていたのですが、相手にはそれが伝わらず、マスクをしたままでのコミュニケーションの難しさを痛感したのです。

学校でも、マスクをつけていることで先輩や新入生の顔がよくわからないという声が多く聞かれます。それを受けて私の所属する生徒会では、全校生徒の交流で何かできないかと考えました。そこで「DATA120」という活動をしようと決めました。120とは全校生徒の人数です。全員

に名前や趣味、最近の出来事などをプロフィールとして書いてもらい、マスクを外した状態での写真とともに掲示したのです。これによって、相手の趣味や考え方などを共有できたのはもちろん、「マスク姿も素敵だけど外した姿も可愛い」「イメージと違った顔をしているな」と、文字通り素顔を知ることができました。そして、学校にも柔らかい雰囲気と一体感が生まれたように感じました。

人と人との関係を紡いでいくには相手を理解することが重要であり、その手段の一つがコミュニケーションです。ですが、コロナウイルスによってマスク着用がマナーとなった今、顔の大半が隠れ表情がわかりにくくなったことで、コミュニケーションの質にも大きな変化が起こりました。それに伴い私たちは、よりはっきりとした感情の表現や相手の気持ちを理解しようとする心など、コミュニケーションの質を上げていく工夫が必要となってきたのではないのでしょうか。

「人生の質はコミュニケーションの質である。」

アメリカの自己啓発家であり、アメリカ大統領など数多くの著名人を指導したアンソニー・ロビンズの残した言葉です。

私たちの心からは、コロナウイルスは感染しません。学校に行ってもマスク、電車に乗ってもマスク、どこを見てもマスクマスクの社会でも、いや、だからこそ、私たちは「心のマスク」を外しコミュニケーションの質、そして人生の質を高めていくことができるはずです。

本物の輝き

群馬県 太田市立南中学校 3年 富田 樹香

みなさんは、日本一危険な国宝が何か知っていますか。それは、鳥取県の三徳山三佛寺にある『投入堂』というお堂です。断崖絶壁をくりぬいたような空間に、危なげにたたずむ不思議な投入堂。どうしてこんな所に建てられているのか。写真を見るだけでも興味をそそられるこの場所に、私は母に誘われて2019年の5月に参拝してきました。

私が住んでいる群馬県から、遠く離れた鳥取県にある投入堂。夜行バスや電車、市バスなどを乗り継いで、やっとの思いで到着した入山口。私たちは「六根清浄」と書かれた襷を肩にかけ、神聖な山へと足を踏み入れました。その途端、五感が急に研ぎ澄まされたような不思議な感覚に襲われました。こんこんと湧き出る清水、どこからか聞こえる鳥のさえずり、湿った苔と土の匂い…。身体全体が、まるで自然と一体化したようでした。滑りやすい木の根や鎖を足場にして、命綱なしで登らなくてはならない険しい山道。自然に身をゆだねつつも、全身の筋肉を使って重力に逆らいながら歩みを進めました。

「あれだ！」
少し開けた景色の先に見えたのは、まさにあの写真にあった投入堂。雄大な自然に囲まれ、鎮座するお堂の威厳ある佇まいに私は息をのみ、ただただ「すごい…」という言葉を繰り返すばかりでした。あの時の衝撃と感動は、今でも鮮明に覚えています。うまく言葉にすることはできません。そんなかけがえのない体験になりました。

私はこれまでに、教科書や本に載っているような、国宝や世界遺産、お城などをいくつも巡ってきました。それは母の影響です。母のモットーは、『本物を知る』こと。幼い頃から私や兄を、全国のいろいろな所へ連れて行ってくれました。私は幼い頃から好奇心が旺盛で、疑問に思ったことを何でも質問するような子どもでした。私が興味を示すと母は、

「それ、絶対本物を見た方がいいよ！」
と言って、実物を目にする機会をたくさん与えてくれました。小学1年生の時に、この旅の最初の地として訪れたひめゆりの塔。当時の私にはさほどの知識もありませんでしたが、何とも言えない強烈な衝撃を受けたことは、今でもはっきりと覚えています。思えばあの時から、私も『本物を知る』ことに魅了されていたのかもしれません。

デジタル化が急速に進む現代、日本を初め世界

中で、バーチャルな世界の可能性が広がっています。いろいろなことを疑似体験できるようになることが、技術の進歩として賞賛されることも珍しくありません。また、そんな折に私達を襲った、コロナウイルスの猛威。ステイホームの名のもとに、インターネットや電子機器を活用する生活の在り方が求められるようになり、それらに対する期待や価値も高まりました。

時代の流れに逆行しているかもしれませんが、私はこういった風潮に、ぼんやりとした疑問を抱いています。それは、私や母が大切にしてきた『本物の価値』が薄れていくように感じるからです。本物がもつ力は本当に凄い。手間や時間をかけて本物を訪ねるからこそ、そのものの質感や色合い、大きさ、匂い、雰囲気などが実感をもって感じられ、どのような風土を背景に存在しているのかが分かる。それこそが『本物の学び』になると思うのです。現代のテクノロジーを駆使すれば、遠く離れた場所にあるものでも、簡単に画面を通して見ることができますし、自分が知りたい情報があれば、即座に調べすることもできます。それも一種の学びや経験であり、価値がないとは思いません。しかしそれは、記憶に焼き付くような深い学びと言えるのでしょうか。木の根をつかみ、ぬかるんだ登山道を一生懸命上った先に見たあの感動は、画面を眺めただけのものとは全く異質なものだと思いませんか。

私は、『本物を知る』ことの価値を教えてくれた母に感謝しています。私達が生きていくこれからの世界は、いろいろなテクノロジーが発達し、きっと想像もつかないほど便利な世の中になっていくのだと思います。それでも私は、手間や時間をかけて『本物』を訪ねる旅を続けたいと思います。母や家族と旅をし、自分一人で旅をし、自分の子供や孫たちともそんな旅を続けていくことが、今の私の夢です。それが私の人生を豊かなものにしてくれると確信しています。

最後に皆さんに問いかけます。あなたが今、目にし、感じているものは『本物』ですか。

第 23 回わたしの主張岩手県大会発表文集

令和 3 年 12 月発行

編集 公益社団法人岩手県青少年育成県民会議

〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通 1 丁目 7 - 1

いわて県民情報交流センター（アイーナ）6 階

電話：019-681-9077 FAX：019-681-9078

ホームページ：<http://www.ipayd.server-shared.com/>

※ 転載等の問い合わせは、上記へご連絡ください。

